令和元年度

郡山市中学生長崎派遣事業

「2019 ナガサキへのメッセージ」

報　告　書

郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会

郡山市核兵器廃絶都市宣言

（昭和５９年６月１５日議決）

世界恒久平和実現のために、核兵器を廃絶することは、人類共通の願望である。

核兵器は人類と地球の命運を左右するにもかかわらず、新しい軍事技術の開発が続けられている。

わが国は、世界で唯一の核被爆国として、平和を愛するすべての国の人々とともに、人類の安全と生存のため不断の努力を続けるべきである。

郡山市は、日本国憲法の精神に基づいて、核兵器の完全廃絶と軍備縮小を全世界に訴え、人類の願いである世界平和の実現を希求し、核兵器廃絶都市であることを宣言する。

令和元年度郡山市中学生長崎派遣事業
「２０１９　ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市長　品　川　萬　里

１９４５年８月。広島と長崎に投下された原子爆弾により、街は一瞬にして廃墟と化し、数多くのかけがえのない命が奪われました。また、今なお多くの被爆者の方々が後遺症で苦しんでおられます。

当市におきましても、４度にわたる空襲により大きな被害を受け、５００名を超える尊い命が犠牲となりました。

あの悲惨な戦争の終結から７４年が経過し、戦争の記憶が風化しつつある今、私たちは当たり前のように平和を享受しております。しかし、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれた、かけがえのないものであることを決して忘れてはなりません。被爆者の平均年齢が８２歳を超え、被爆者が減少していく中で、核兵器使用により引き起こされた惨禍が二度と繰り返されることのないよう、その廃絶を願う全ての人々の思いを次の世代に伝えていくことは、平和な時代に生きる私たちの使命であります。

そのため、「核兵器廃絶都市」を宣言する当市では、「平和を考える市民の集い実行委員会」との共催により、次代を担う中学生を被爆地へ派遣する事業を平成８年度から実施しており、今年も、市内各校の代表生徒に役員を加えた派遣団３３名を長崎市へ派遣いたしました。

派遣された中学生の皆さんは、原爆資料館や永井隆記念館の見学、平和祈念式典への参列をはじめ、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話や平和学習、交流会などへの参加を通して、戦争の悲惨さや原子爆弾による被害の恐ろしさ、命の大切さなど、たくさんのことを学んだことと思います。また、全国から集まった同世代の青少年と、戦争のない世界の実現のために意見を交わすとともに、交流を深めることができたことと思います。中学生の皆さんには、被爆地長崎での経験を今後の成長の糧にしていただくとともに、４日間の研修を通して学んだことを家族や友人などできるだけ多くの方々に話し、平和の大切さを伝えていただきたいと思います。

この報告書には、派遣された中学２年生２９名が平和の尊さや核兵器廃絶の必要性について学んだことや感じたこと、平和への思いがそれぞれの言葉でまとめられています。この報告書が一人でも多くの方々にご覧いただけることを願うとともに、平和について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

長崎市の皆様には、当市派遣団を今年も温かく迎え入れていただき、厚く御礼を申し上げます。また、長崎平和宣言に込められた「福島の皆さんを変わらず応援していきます」とのメッセージに、大変勇気づけられるとともに、改めて復興への歩みを着実に進めていく所存であります。

結びに、本事業の実施に当たり多大なる御支援、御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝を申し上げまして、挨拶といたします。

令和元年度郡山市中学生長崎派遣
「２０１９　ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市教育委員会教育長　小　野　義　明

市内各中学校から１名ずつ選出された皆さんは、令和元年度郡山市中学生長崎派遣団員として、令和元年８月７日から４日間長崎市を訪問し、長崎市長に「平和へのメッセージ」を伝える重要な役割を果たす中で、平和の尊さや核兵器廃絶の必要性を強く認識されたことと思います。また、厳粛な雰囲気の式典への参加や、平和公園や原爆資料館等の見学、全国から集まった人々との交流などをとおして、視野を大きく広げることができました。

７４年前の８月９日、原子爆弾の投下により、長崎の街は廃墟となり、多くの尊い命が奪われました。被爆された方々は、癒えることのない傷を負い、今もなお、原爆による後遺症や健康への強い不安に苦しみ続けているといわれております。また、被爆者の高齢化が進み、戦争による被爆体験を今後どう受け継いでいくのかが問われております。

そのような中、長崎原爆犠牲者慰霊平和記念式典に参加するなど、実際に長崎の地に立ち、長崎の人々が歩んできた長い復興の道のりに触れることができたことは、東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故からの復興の担い手である皆さんにとって、大変意義深いことであると感じています。互いに助け合い、励まし合い、一致団結して街の復興に向けて力強く歩んできた様子を、自らの目で確かめ、自らの耳で聞いたこのたびの体験は、「未来の平和」を考える上で、きっと大きな財産になったことと思います。

この報告書は、長崎で様々なことを体験した派遣団の皆さんが、実際に感じ取ったことを、平和へのメッセージとしてまとめたものです。どのページを見ても、一人一人の感性でとらえた平和への思いが、それぞれの言葉でつづられています。

表現の違いこそあれ、参加した皆さん全員が、核兵器を使う愚かさや、平和の大切さに触れるとともに、「未来の平和」のために自分自身ができることについての強い決意を述べていることに、大きな感動を覚えました。

どうか、派遣団の皆さんには、この体験で感じた思いを多くの友人に語り伝えるとともに、人類の未来を築き上げていくために、持てる限りの「英知」を結集してほしいと思います。同時に、この報告書が一人でも多くの皆様に読まれることを切に願っております。

結びに、所期の目的を達成され、立派な報告書を完成させた派遣団の皆さんと、派遣に御尽力いただいた関係者の皆様をはじめ、御協力をいただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本市の中学生を温かく受け入れ、全世界に向けた長崎平和宣言の中で「長崎は、核の被害を体験したまちとして、原発事故から８年が経過した今も放射能汚染の影響で苦しんでいる福島の皆さんを変わらず応援していきます」というメッセージを発信していただいた長崎市長をはじめ、長崎市の皆様の益々の御健勝と、長崎市の御発展を御祈念申し上げ、挨拶といたします。

目　　次

【事業内容】

平和へのメッセージ …… 1
事業概要 …… 2
派遣団名簿 …… 4
研修行程 …… 6

【研修風景】

集合写真 …… 7
写真で綴る研修風景 …… 8

【団員報告】

村上陽菜（日和田中学校）…… 13
吉田あゆ美（行健中学校）…… 15
添田羚斗（明健中学校）…… 17
大和田くれは（安積中学校）…… 19
三浦楓大（安積第二中学校）…… 21
大原真琴（三穂田中学校）…… 23
橋本圭祐（逢瀬中学校）…… 25
川崎瑞歩（片平中学校）…… 27
宗像遼大（喜久田中学校）…… 29
本田芽愛（熱海中学校）…… 31
村上寛奈（守山中学校）…… 33
山口航（高瀬中学校）…… 35
大河内玲音（二瀬中学校）…… 37
武田隼輔（郡山第一中学校）…… 39
本間詠（郡山第二中学校）…… 41
小菅泰誠（郡山第三中学校）…… 43
鈴木紀子（郡山第四中学校）…… 45
相樂堯哉（郡山第五中学校）…… 47
大河原舞音（郡山第六中学校）…… 49
大竹宏武（郡山第七中学校）…… 51
面川苺花（緑ケ丘中学校）…… 53
丸野和士（富田中学校）…… 55
西澤琥珀（大槻中学校）…… 57
安田悠人（小原田中学校）…… 59
伊藤暉（宮城中学校）…… 61
横田優美（御舘中学校）…… 63
川村彩人（郡山ザベリオ学園中学校）…… 65
遠藤亜子（西田学園）…… 67
谷苗真拓（湖南小中学校）…… 69

§ 事 業 内 容 §

戦後７４年を迎え、原子爆弾で亡くなられた多くの方々に哀悼の意を捧げます。

また、今なお被爆による後遺症に苦しんでおられる皆様にお見舞いを申し上げます。

貴市におかれましては、市民の皆様のたゆまぬ御努力により、原子爆弾の凄絶な被害を乗り越えられ、今日の発展を築かれました。

また、平和に対する揺るぎない御意思のもと、世界の先頭に立ち、自らが受けた惨状を日本国内はもとより世界中の人々に伝え、「世界の恒久平和」と「核兵器廃絶」の実現を目指し、積極的な活動を長年にわたり展開されておりますことに、心から敬意を表します。

終戦から７４年が経過し、戦争や原子爆弾の恐ろしさを直接経験された方々が少なくなってきており、国民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、戦争や被爆の記憶を次の世代にどう受け継いでいくのかが課題となっております。

当市では、今日の平和が、多くの方々の犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを次の世代に伝えていく責務があるとの思いから、次代を担う中学生を貴市に派遣し、「戦争の悲惨さ」や「平和の持つ意義」を深く理解するとともに、被爆地を訪れ、全国から集まる同世代の仲間たちと意見を交わし合うことを目的として、様々な研修活動に参加させていただきます。

この貴重な経験を通して、参加者一人ひとりが「核兵器廃絶のために必要なこと」や「平和のために自らができること」を学び感じ取り、同世代の青少年をはじめとする多くの人々に伝えてくれるものと期待しております。

今後とも、国内外の自治体の皆様と連携を図りながら、貴市で起きた惨禍が二度と繰り返されることのないよう、「核兵器のない世界」及び「世界の恒久平和」の実現に向け、取り組んでまいります。

さて、当市は、東日本大震災並びに東京電力福島第一原子力発電所の事故により大きな影響を受けましたが、発災から８年余が経過する中、貴市をはじめ数多くの皆様からの御支援、お心配りを頂戴しながら、課題を一つひとつ乗り越え、復興の歩みを進めてまいりました。長崎市民の皆様には、是非、当市へお越しいただき、新たな未来へと歩みを進めている姿を感じていただければ幸いであります。

結びに、「核兵器廃絶」及び「世界の恒久平和」の実現を強く念願いたしますとともに、貴市のますますの御発展並びに長崎市民の皆様の御活躍と御多幸を心から祈念申し上げまして、メッセージといたします。

令和元年８月９日

長崎市長　田　上　富　久　様

郡山市長　品川　萬里

令和元年度郡山市中学生長崎派遣事業
「２０１９　ナガサキへのメッセージ」
事　業　概　要

１　趣旨

市民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを忘れてはならない。

これを次代に伝えるのが今日に生きる私達の使命であると考え、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市における平和への取り組みとして、平和の尊さや核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を認識してもらうことを目的に、感受性豊かな中学２年生を被爆地である長崎市へ派遣して、研修活動を実施する。

また、報告会及びパネル展の開催や報告書の作成・配布等を通して、本市の取り組みについて広く市民への周知を図る。

２　主催

郡山市／平和を考える市民の集い実行委員会

３　事業内容

(1) 派遣団結団式及びオリエンテーション

ア　開 催 日　　令和元年７月２９日（月）

イ　会　　場　　郡山市役所特別会議室

ウ　内　　容　　団員証交付、「平和へのメッセージ」付託、「折り鶴」付託、団長及び団員代表あいさつ

(2) 派遣研修

ア　派 遣 先　　長崎市

イ　派遣人員　　団員２９名、役員４名（団長、副団長、支援者、事務局各１名）

ウ　派遣期間　　令和元年８月７日（水）～１０日（土）

エ　研修内容

・「平和へのメッセージ」伝達（８月８日）

・長崎原爆資料館見学（８月８日）

・平和公園見学（８月８日）

・永井隆記念館（如己堂）見学（８月８日）
・青少年ピースフォーラム（平和学習、交流会）参加（８月８日～９日）
・長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列（８月９日）

(3) 報告会
ア　開 催 日　　令和元年１１月２３日（土）
イ　会　　場　　郡山市役所特別会議室
ウ　内　　容
・被爆体験伝承者による講話（長崎市家族証言者）
・派遣団員による研修報告

(4) 写真パネル展・原爆パネル展
派遣団員が研修を通して撮影した写真に自身のメッセージを添えて展示する「写真パネル展」及び原爆に関する資料を展示する「原爆パネル展」の開催
ア　１ 回 目（予定）
・期間　令和元年１１月２３日（土）～１２月６日（金）
・会場　郡山市役所本庁舎正面玄関ホール
イ　２ 回 目（予定）
・期間　令和２年２月１日（土）～２月１６日（日）
・会場　郡山市中央図書館２階

(5) 報告書
派遣団員による研修の成果をまとめた、『令和元年度郡山市中学生長崎派遣事業「２０１９　ナガサキへのメッセージ」報告書』の作成、配布

(6) 中学校へのパネル貸出
平和学習等への活用を目的とした、展示希望のある市内中学校への写真パネル及び原爆パネルの貸出し

令和元年度　郡山市中学生長崎派遣団名簿

役　員

役　職　名	氏　　名	性別	所　　属
団　　長	宗方（むなかた）　成利（なるとし）	男	郡山市総務部職員厚生課長
副　団　長	紺賴（こんらい）　憲一（けんいち）	男	平和を考える市民の集い実行委員会監事
支　援　者	大竹（おおたけ）　英樹（ひでき）	男	郡山市立富田中学校教諭
事　務　局	橋本（はしもと）　浩光（ひろみつ）	男	郡山市総務部総務法務課総務管理係主任

団　員

番　号	学　　校　　名	氏　　名	性　別
1	日和田中学校	村上陽菜（むらかみ はるな）	女
2	行健中学校	吉田あゆ美（よしだ あゆみ）	女
3	明健中学校	添田羚斗（そえた れいと）	男
4	安積中学校	大和田くれは（おおわだ くれは）	女
5	安積第二中学校	三浦楓大（みうら ふうた）	男
6	三穂田中学校	大原真琴（おおはら まこと）	女
7	逢瀬中学校	橋本圭祐（はしもと けいすけ）	男
8	片平中学校	川崎瑞歩（かわさき みずほ）	女
9	喜久田中学校	宗像遼大（むなかた はると）	男
10	熱海中学校	本田芽愛（ほんだ めい）	女
11	守山中学校	村上寛奈（むらかみ かんな）	女
12	高瀬中学校	山口航（やまぐち わたる）	男
13	二瀬中学校	大河内玲音（おおこうち れおん）	女
14	郡山第一中学校	武田隼輔（たけだ しゅんすけ）	男
15	郡山第二中学校	本間詠（ほんま うた）	女
16	郡山第三中学校	小菅泰誠（こすげ たいせい）	男
17	郡山第四中学校	鈴木紀子（すずき のりこ）	女
18	郡山第五中学校	相樂堯哉（さがら たかや）	男
19	郡山第六中学校	大河原舞音（おおかわら まおん）	女
20	郡山第七中学校	大竹宏武（おおたけ ひろむ）	男
21	緑ケ丘中学校	面川苺花（おもかわ まいか）	女
22	富田中学校	丸野和士（まるの かずし）	男
23	大槻中学校	西澤琥珀（にしざわ こはく）	女
24	小原田中学校	安田悠人（やすだ ゆうと）	男
25	宮城中学校	伊藤暉（いとう ひかる）	男
26	御舘中学校	横田優美（よこた ゆうみ）	女
27	郡山ザベリオ学園中学校	川村彩人（かわむら あやと）	男
28	西田学園	遠藤亜子（えんどう あこ）	女
29	湖南小中学校	谷苗真拓（やなえ まひろ）	男

「2019 ナガサキへのメッセージ」研修行程

８月７日（水）

6:00集合 郡山市役所 ---- 6:10 出発式 ---- 6:20 バス 7:10 福島空港 ---- 8:05 飛行機 ANA1696 9:15 伊丹空港 ---- 9:50

飛行機 ANA781 11:05 長崎空港 ---- 11:30 バス 12:30 昼食 ---- 13:15 バス 13:30 長崎市民会館

14:00 長崎さるく（長崎市内散策） ---- 16:30 バス 17:00 宿舎 ---- 18:30 夕食・ミーティング ---- 20:00 ---- 22:00 就寝

８月８日（木）

7:00 起床 ---- 7:30 朝食 ---- 8:50 宿舎 ---- バス 9:20 市長メッセージ伝達、原爆資料館 ---- 9:50

12:00 平和公園・永井隆記念館 ---- 12:30 昼食 ---- 13:15 ---- 13:30 青少年ピースフォーラム１日目（平和会館） ---- 17:35

18:10 青少年ピースフォーラム交流会（長崎新聞文化ホール） ---- 19:40 バス 20:00 宿舎 ---- 20:30 夕食・ミーティング ---- 21:00 ---- 22:30 就寝

８月９日（金）

6:30 起床 ---- 7:00 朝食 ---- 8:20 宿舎 ---- バス 9:30 平和祈念式典（平和公園／原爆資料館） ---- 11:50

12:20 昼食 ---- 13:10 バス 13:30 青少年ピースフォーラム２日目（平和会館） ---- 15:30 バス 15:50 日本二十六聖人記念館・大浦天主堂 ---- 18:00

バス 18:00 宿舎 ---- 18:30 夕食・ミーティング ---- 21:30 ---- 22:30 就寝

８月１０日（土）

6:30 起床 ---- 7:10 朝食 ---- 8:30 宿舎 ---- バス 10:00 長崎空港 ---- 11:00 飛行機 JAL2374

12:10 伊丹空港（昼食） ---- 15:45 飛行機 ANA3181 16:50 福島空港 ---- 17:10 バス 18:00到着 郡山市役所 ----

18:10 解散式 ---- 18:30

【宿泊先】矢太楼（所在地：長崎県長崎市風頭町2-1）

§　研　修　風　景　§

「平和祈念像」にて

写真で綴る長崎派遣研修風景 ①

①7月29日に市役所で結団式を行いました。団員32名、市長及び平和を考える市民の集い実行委員会長と集合写真。

②8月7日朝、市役所で出発式を行いました。団員代表の面川さんが研修の目標について話してくれました。

③長崎空港に到着。初めて飛行機に乗る団員も多くいました。後ろにいる龍は、長崎くんち（お祭り）の出し物の一つ、龍踊り（じゃおどり）です。

④長崎さるく（長崎の方言で歩き回ること）の様子、その1。中島川のハートストーン。みんなで必死に探しました。

⑤長崎さるくの様子、その2。眼鏡橋。日本最古のアーチ型石橋で、国の重要文化財に指定されています。

⑥長崎さるくの様子、その3。興福寺（こうふくじ）。日本最初の唐寺。隠元和尚の話を案内人の方から聞きました。

⑦2日目は、品川市長より託された「平和へのメッセージ」を、派遣団の代表が原爆資料館の大久保館長に届けることから始まりました。

⑧原爆資料館には、原子爆弾による被害の実相を物語る展示物の数々がありました。核兵器開発の歴史や原爆が投下にされるに至った経過について学びました。

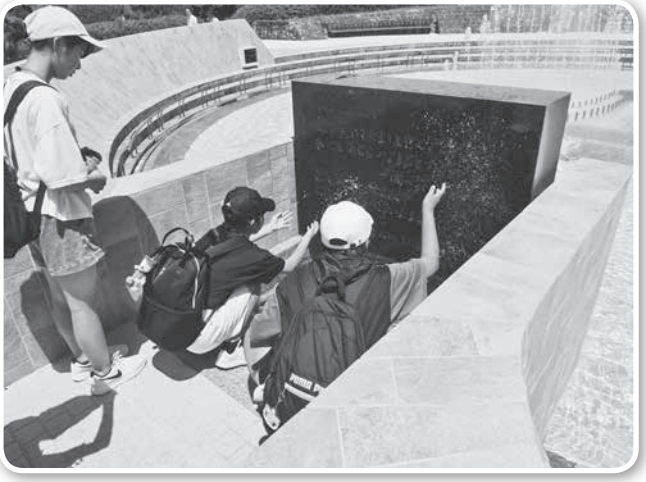
⑨永井隆記念館を見学しました。死の直前まで原子病の研究を続けた博士。原爆、人間、愛、平和に関する多数の資料を真剣に読んでいました。

⑩式典前に平和祈念像を見学しました。式典の準備が進められる中、多くの方たちが参拝に来ていました。

⑪平和公園内にある長崎の鐘。この鐘を鳴らして、世界の恒久平和を願いました。

⑫市民の皆さんから託された千羽鶴を団員代表の遠藤さんが奉納しました。

写真で綴る長崎派遣研修風景 ②

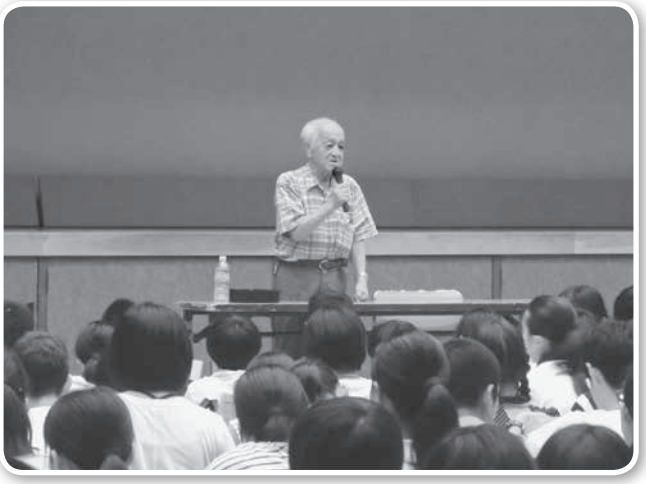


⑬平和の泉の意味を知り、ほとんどの団員が衝撃を受けました。団員一人ひとりがこの少女のことを想い、石碑に献水しました。

⑭爆心地公園にある被爆当時の地層が保存展示されていました。ガラスの破片や茶碗など、無数の残骸が、被爆当時の悲惨な様子を物語っています。

⑮青少年ピースフォーラムの開会を待っているところです。これからどんなことが始まるか、期待と不安でいっぱいです。

⑯青少年ピースフォーラム、フィールドワークでは、原爆資料館周辺の関連モニュメントや国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見学しました。



⑰青少年ピースフォーラム、被爆体験講話では、築城昭平さんの貴重な体験談を聴くことができました。

⑱全国から集まった仲間との交流会が開催されました。いろんな人と話し、友情の輪を広げました。

⑲3日目。8月9日。猛暑の平和公園。団員を代表した10名が平和祈念式典に参列しました。残りの19名は原爆資料館ホールで見守りました。

⑳青少年ピースフォーラム 2日目。班ごとに分かれて争いの原因と解決策について意見を出し合いました。

㉑青少年ピースフォーラムの最後に全員で記念撮影を行いました。

㉒3日目のミーティング。青少年ピースフォーラムの修了証が、宗方団長から一人ひとりに手渡されました。みんな立派なピースコミュニケーターです。

㉓世界文化遺産関連施設である日本二十六聖人記念館を見学しました。記念碑「昇天のいのり」の前で記念撮影を行いました。

㉔日本二十六聖人記念館に展示してある資料の説明を受けながら、キリスト教の歴史について学びました。

写真で綴る長崎派遣研修風景 ③

㉕宿舎に戻り、夕食後、報告会の発表内容や役割分担など話し合いを重ねているところです。

㉖郡山に到着し、市役所で解散式を行いました。団員代表の三浦さんが長崎で学んだことを生かし、平和への第一歩を踏み出したいと意気込みを語りました。

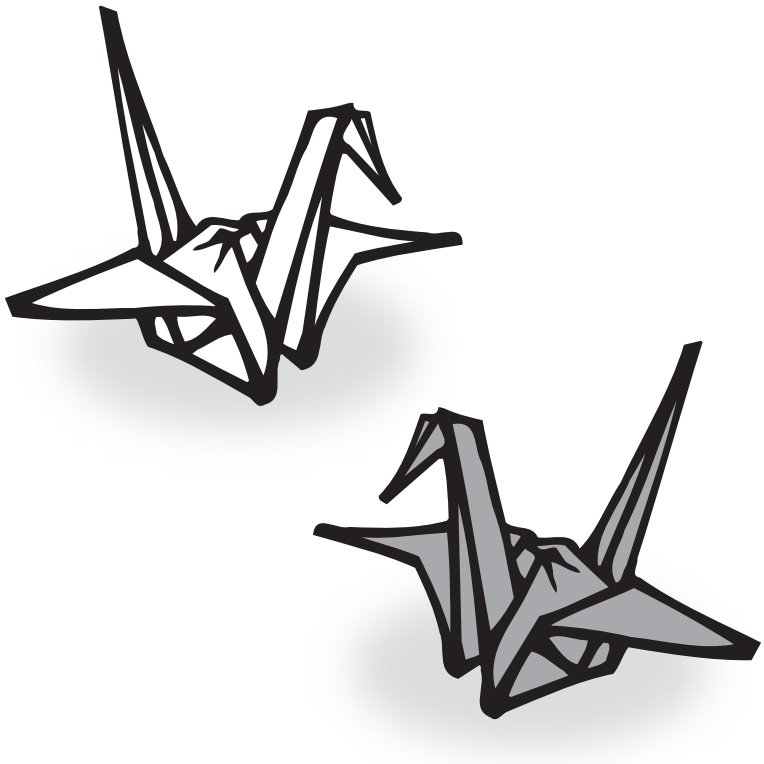
㉗1班団員（左から）川村彩人、村上陽菜、山口航、川崎瑞歩、大竹宏武、本間詠（班長）、三浦楓大、西澤琥珀（敬称略）

㉘2班団員（左から）本田芽愛、武田隼輔、横田優美、丸野和士、吉田あゆ美、橋本圭祐（班長）、鈴木紀子（敬称略）

㉙3班団員（左から）安田悠人、遠藤亜子、大河原舞音、添田羚斗、村上寛奈、小菅泰誠、大原真琴（班長）（敬称略）

㉚4班団員（左から）谷苗真拓、大和田くれは、宗像遼大（班長）、面川苺花、相樂堯哉、大河内玲音、伊藤暉（敬称略）

§ 団 員 報 告 §



平和への想い

郡山市立日和田中学校２年　村　上　陽　菜

1　派遣研修への参加に当たって

夏休みに郡山市の中学２年生を対象とした長崎派遣事業があることを先生から伺った時､｢これは原爆や平和について詳しく知ることができるチャンスだ」と思い参加を決めた。

８年前、東日本大震災の影響で福島県でも原子力発電所が爆発し、放射線による被害を大きく受けた。今でも長崎や広島の人々は白血病などに苦しんでいる。その事実を伝えなければならないと思い今回の研修に参加した。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館

原爆資料館には、原子爆弾に関する資料や被爆後の様子が展示されていた。

原子爆弾が投下された 11 時２分で止まったままの柱時計や熱線によって溶けたビン、中身が黒焦げになった弁当箱などが展示されていた。また被爆した人の写真も展示されており、私は言葉を失った。改めて原爆の恐ろしさを知った。

（２）平和祈念式典

８月９日、私は平和祈念式典に参列した。長崎市内の鐘が鳴り響く中、午前 11 時２分、原子爆弾投下の時刻に合わせ黙とうをした。私は「長崎を最後の被爆地に、そして核兵器のない平和な世界になってほしい」と心の中で何度も願った。この日をきっかけに多くの人々が平和について考えてほしいと思った。

（３）青少年ピースフォーラム

８月８日、９日の２日間にわたり全国の小中学生と一緒に平和について意見交換をした｡｢戦争が起こる原因」について考えたとき、私たちの班では「領土・貿易」について討議した。解決策としては「互いを尊重・信頼し合い、武力で解決しない」という意見にまとまった。今も世界には１万 3,380 発もの核兵器があると言われている。全世界が平和というのはまだまだ遠いようだ。

平和を実現するには、一人ひとりが平和を願い続けるという事が大事なのだと思った。

＜平和祈念像＞

3　心に残ったこと

この写真は「平和祈念像」である。この像は原爆投下の 10 年後に完成した。右手を空に上げるのは「原爆の脅威」、左手の水平は「平和」を表している。曲げた右脚は「原爆投下の長崎市の静けさ」、立てた左脚は「救った命」。そして、軽く閉じた目は「戦争犠牲者の冥福を祈る」という意味が込められている。

74 年前の 8 月 9 日、午前 11 時 2 分に一発の原子爆弾が投下され、長崎の町は一瞬で焼け野原となった。そして、たくさんの尊い命が奪われた。私は、この平和祈念像の前に立ち 74 年前を想像した。どんなに恐ろしかっただろう、どんなに苦しかっただろう、どれだけ想像しても足りるはずもない。そう分かっていても、自分の想像できる情景や感情の全てを使って考えた。人々の平和への想いがひとつになった像は、今に至るまで、長崎市の人々の努力と復興をずっと見守り続けているのだと感じた。

4　派遣研修に参加して感じたこと

4 日間の研修で学んだことや共に過ごした仲間との出会いは貴重な経験となった。今回の研修で原爆の悲惨さや平和の尊さについて知ることが出来た。さらに長崎市の歴史や文化に触れることも出来た。

私は、戦争は二度とくり返してはならないと思っている。平和な世界にしていくために、今私たちにできることは戦争を体験した人々の話を聴き、その話を次の世代の人々に伝えていくことだと思う。今回の研修で学んだことをこれからの生活に役立てていき、多くの人々や次の世代の人々に原爆の恐ろしさや平和の尊さを伝えていきたいと思う。

長崎派遣事業に参加して

郡山市立行健中学校２年　吉　田　あゆ美

1　派遣研修への参加に当たって

長崎と言えば、多くの人がカステラやちゃんぽんを思い浮かべると思う。しかし、一番忘れてはならないことがある。それは、1945 年８月９日午前 11 時２分に投下された原爆のことだ。歴史の授業で、原爆が長崎に投下されたことは知っていたが、どんな被害があったのか、どのくらいの規模だったのか、などといったことは全く知らなかった。だから、今回のこの派遣事業のことを聞いたときに「戦争について知るには、この機会しかない」と思った。そして、長崎の過去と現在の姿を実際に見て勉強したいと思った。

2　派遣研修に参加して

（1）原爆資料館

それは衝撃的なものだった。熱線を受けた人の写真、体に刺さったガラスの破片、ファットマンの実物大の模型、午前 11 時２分を示したまま止まってしまった時計など、原爆の悲惨さやすさまじさが分かる資料が約 1,500 点もあった。その中でも特に印象に残ったのは、実物大で３m 弱の原子爆弾の模型だ。プルトニウムという物質を使った爆弾で、この爆弾一つで約７万人の尊い命が奪われたことを聞いて、とても胸が痛みました。こんなに小さな爆弾が、一瞬にしてあのきれいな長崎の町を奪ったことを考えると、私はこれ以上ないくらいに恐怖を覚えた。

（2）青少年ピースフォーラム

２日間の研修で、全国から集まった小中学生と大学生のボランティアの方と、平和について考えて意見交換を行った。その中で戦争の原因や解決策についてグループで話し合った。原因としては、領地や資源の奪い合い、解決策としては、相手の立場になって考えてみる、などといった意見が出された。いろいろな考えを持ったグループの仲間と意見交換をして、自分では予想もつかなかった意見が出て、今まで以上に平和について深く考えることができた。また、２日目には実際に被爆した築城昭平さんの講話を聞くことができた。築城さんは、原爆が投下された直後のことをこう語っていた。「爆風で体は飛び、熱線を浴び顔にやけどを負った人は、どこが正面かも分からず、まさに地獄のようだった」と。この話を聞いてこんな凄惨な姿と風景はまさにこの世のものではないと私は思った。恐怖と怒りを感じ、そして、とても悲しくなった。築城さんは最後に、「自分は、命の限り、今の若者に長崎で実際に起きた原爆について伝えていきたい。そして、核兵器のない本当に平和な世界にしていってほしい。」と私たちに訴えていた。原爆の恐ろしさは実際に体験した人しか分からないかもしれない。だが、私たちにもできることは確実にあると築城さんの講話を聞いて思った。被爆した方の痛みを知り、それを次の世代に伝えていくのが私たちの使命だと思う。そうした小さな努力から、世界を本当の平和な世界にしていきたい。

＜全国各地から届いた千羽鶴＞

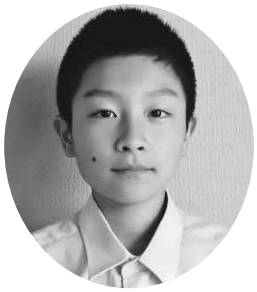
3　心に残ったこと

この写真は、原爆資料館に飾られている全国各地から届いた千羽鶴である。私は館内に入ってから一瞬でこの鶴に目を奪われた。そこには、千羽鶴とともに長崎を応援するメッセージが添えられていた。「頑張れ！長崎！」、「長崎に平和を」といった言葉だった。色とりどりの千羽鶴。初めは、原爆によって命を落とした方々が平和にしてほしいと訴えているように感じ、とても心が苦しく絶対に平和な世界にしたいと思った。だが、添えられていたメッセージを見たときには、違う考えが生まれていた。それは、日本中、世界中の人々が、平和について考え、平和を願えば、自然と世界から核兵器はなくなり、戦争のない平和な世界が絶対に訪れるというものだ。世界中の人に千羽鶴を見に来てほしい。そして、小さな願いから、やがて、世界中の大きな願いとなり、平和になってほしいと私は願う。

4　派遣研修に参加して感じたこと

この４日間を振り返って、本当に参加して良かったと思った。この夏、この研修で原爆について考えたからこそ、「命の重さ」や「平和の尊さ」を学ぶことができた。そして、戦争は、今の時代に生きている私たちにとって他人事ではないことが分かり、少し怖くなった。でも、今回被爆者の方の貴重な話を聞き、平和祈念式典に実際に参加して、その恐怖心はなくなり平和への願いを伝えていく使命を自覚した。今年、原爆の被害を受けた現地を自分の目で見て、耳で聴いて、肌で感じて平和について考えた私たちから「平和の尊さ」を伝えていきたい。そして、戦争のない、誰一人悲しい涙を流さない美しく平和な世界をつくっていきたい。

新たな時代を築くために



郡山市立明健中学校２年　添　田　羚　斗

1　派遣研修への参加に当たって

以前の私は、「1945 年８月９日、長崎に原爆が投下された」という事実は知っていた。しかし、それによってどのくらい街に被害があり、人々に影響があったのかまでは分からなかった。「いったいどのような悲劇が街を襲ったのだろう。」と考えたとき、学年の先生から長崎派遣事業についての話をいただいた。私はその時、「これは原爆について詳しく知ることができるチャンスだ。」と思った。そして、現地に足を運び、74 年前の８月に何が起こったのか、この目で見て、耳で聴き、肌で感じたいと思い研修に参加することを決意した。

2　派遣研修に参加して

現在の長崎は、青い海や緑豊かな山が広がり、活気にあふれた美しい街である。ここに原爆が投下されたとはとても考えられなかった。

（１）原爆資料館

原爆資料館には、原爆が投下された瞬間の映像や資料、被爆後の様子が展示されていた。11 時２分を指して止まった柱時計や、熱線により溶けてくっついた瓶、中身の米飯が黒焦げになった弁当箱、皮膚が焼かれた被爆者の写真などがあった。

特に印象に残ったのは、1945 年８月９日午前 11 時２分、長崎に投下された原爆「ファットマン」の実物大の模型を見学したことだ。この原爆は、プルトニウムによる核分裂作用を利用したもので、全長は予想していたものよりも小さく約 3.6 メートルで、核分裂物質はソフトボールほどの大きさに驚かされた。こんなに小さな物質が一瞬にして死傷者約 15 万人もの甚大な被害をもたらしたとは考えられなかった。もしこの原爆が現在私たちの住んでいる街に投下されたら、と想像をするだけでも鳥肌が立った。原爆資料館を後にした時、原爆の恐ろしさを再確認するとともに、一日でも早く世界中から核兵器が無くなってほしいと今まで以上に強く感じた。

（２）平和祈念式典

８月９日に行われた平和祈念式典に、私は原爆資料館ホールにて参列した。私は、式典で行われた中で印象に残った場面が二つある。一つ目は、被爆者合唱曲“もう二度と”の中の「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」というフレーズを聴いた時だ。なぜなら、核兵器廃絶と世界の恒久平和への強い想いが被爆者の方からのメッセージとして伝わってきたからだ。それとともに、この被爆者の方の想いを後世に受け継いでいこうと心に誓った。二つ目は、原爆が投下された時刻の午前 11 時２分に、長崎の鐘が鳴り響く中、１分間の黙とうを捧げたことだ。なぜなら、74 年前のその時、何の罪もない多くの人が熱さと放射線の影響で苦しんでいたことを想像すると、胸が張り裂けるような痛みが襲ってきたからだ。私はこの時、「世界中が永久に平和になりますように。」と心の中で唱えながら黙とうを捧げた。

式典で、被爆者や長崎市長などの方々が訴えた平和への想いが、未だに存在する核保有国に届いてほしいと心から願う。

（３）青少年ピースフォーラム

平和会館ホールにて２日間行われた青少年ピースフォーラムでは、全国から集まった約 500 人の青少年やピースボランティアの方々と共に平和について考えたり学んだりした。

１日目は、被爆者の築城昭平さんの講話を聴

＜少女の手記＞

いた。築城さんは 18 歳の時、爆心地から 1.8 キロメートル離れた学校の寮で睡眠中に被爆された。私が築城さんの講話を聴いて、最も印象に残ったことは、「睡眠中に布団を頭からかぶっていたおかげで生き残ることができた。」と話していたことである。もしこのような行動をとっていなかったら、全身に大火傷を負って亡くなっていたという。この話を聴いた私は、「布団のような薄いものでも命を守ることができるのならば、一人でも『核兵器はいらない』と訴えれば、微力ながらも核兵器廃絶に近づくのではないか。」と感じた。

２日目は、それぞれのグループに分かれて戦争の原因とその解決策について話し合った。今までは、平和については自分だけの考えしか持っていなかったが、この話し合いを通して新たな考えを自分の中に取り入れることができ、さらに別の視点からも考えることができた。その後、グループごとにまとめた意見のピースを繋ぎ合わせると平和の象徴が完成した。その時私は、「同心協力」とはまさにこのことを意味するのだと感じた。

3　心に残ったこと

私が今回の派遣研修の中で最も印象に残ったことは、平和の泉の石碑に刻まれた文字を読んだことだ。この石碑に記されている内容は、当時９歳の少女が書いた手記である。きっと少女は原爆が投下された時、熱線と爆風によってとてつもなく熱くなり、水がたまらなく欲しくなったあまり、油が浮いている水までも飲んでしまうほど精神的に追い込まれたのだろう。もし自分が少女の立場だったら、何も考えられずただ立ち尽くすであろう。いや、もしかしたら立つことすらできないかもしれない。少女のような苦しい思いをしながら亡くなってしまった方もたくさんいたに違いない。

私はこの石碑を見て、もう二度と同じような戦争をしてはいけないと心の底から強く感じた。そして、この石碑が建てられた理由は、これからは核兵器が存在せず、争いのない平和な世界になってほしい、と後世に伝えるためなのではないかと考える。私たちはこの想いを次世代に伝え続けなくてはならない。

4　派遣研修に参加して感じたこと

この４日間、被爆地「長崎」で学習したこと、そして、同じく平和を願う仲間と共に過ごしたことは、とても貴重な体験となった。

私は今回の派遣研修を通して、分かったことがいくつかある。その中のひとつは、「今ある平和は当たり前ではない」ということだ。学校へ行き、友達と笑い合いながら会話をし、やりたいことに思う存分打ち込める。そして、三度の食事をお腹いっぱいに食べられる。今では当たり前の日常だが、戦時中は常日頃から現在の「当たり前」のことができていなかったのである。今では当たり前となっていることがどれだけ幸せなことなのか今回の研修で実感させられた。

現在、被爆者の平均年齢は 82 歳を超え、被爆者の方から直接話を聞くことができるのは私たちの世代が最後なのかもしれない。そのため、直接話を聴いた私たちが、積極的に周囲の人々に伝え続けなければならない。そして「核兵器を廃絶しよう！」「戦争はやめよう！」と平和を望む声を上げなくてはならないと私は思う。

新たな時代を築くためにも。

当たり前な平和

郡山市立安積中学校２年　大和田くれは

1　派遣研修への参加に当たって

私はこの長崎派遣に参加するために、長崎はどんなところなのか考えた。思いついたものは、長崎ちゃんぽんやカステラなどの食べ物、大浦天主堂や出島などの建造物。それと世界で２番目の原子爆弾の被爆地ということだ。今回の派遣で私は長崎に落とされた原子爆弾とその被害について深く学びたいという思いでこの研修に参加した。

2　派遣研修に参加して

（１）長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原爆の投下時間である11時２分を指したまま止まっている時計や長崎型原爆通称ファットマンの原寸大の模型、原爆の被害にあった人や物、動物などの目をそむけたくなるような展示物がたくさんあった。原爆の熱線で溶けてその状態で固まった硝子の瓶や焦げてしまった瓦など、実際に自分の手で触れられるものもいくつかあった。とても重い空気のまま出口へと向かうとそこには日本全国、世界各国から送られた今まで見たことのないほどたくさんの千羽鶴が、所狭しと並んでいた。これを見て私は、国や地域が異なっても平和を願う想いは同じなんだと思いとてもうれしかった。

（２）永井隆博士

永井博士は自分も被爆してけがをする中、自分には頭に包帯を巻くという応急処置だけで、生き残った医師や看護師とともに、家族の消息も尋ねないまま、何度も意識を失いながらも救護活動にあたったそうだ。その１年後白血病が悪化し、寝たきりの状態になるも、原子病の研究や、本を書いて平和と命の大切さを訴え、生きる希望と勇気を与えていった。博士の本にこんな言葉がある。

『戦争はおろかなことだ！戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである。』

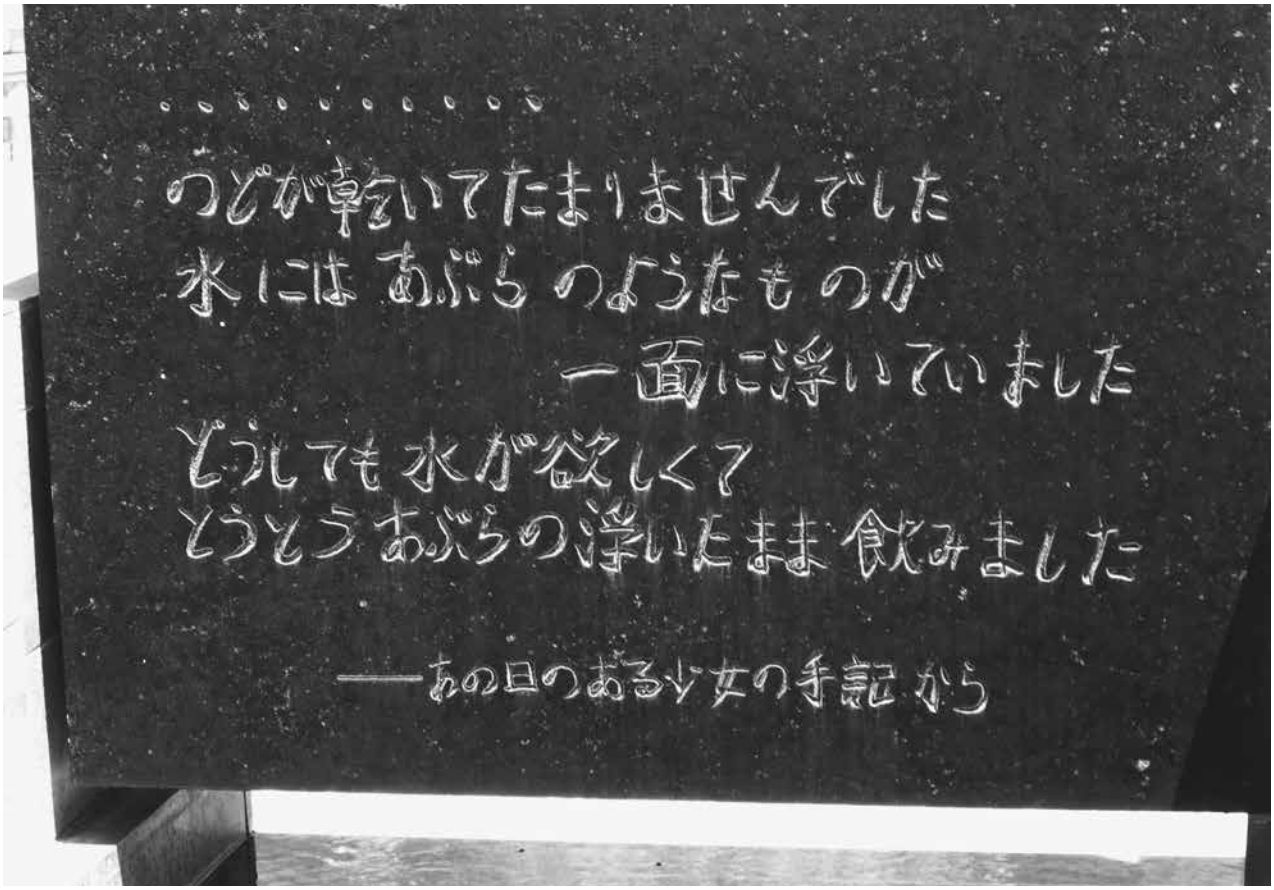
花咲く丘より

この言葉には戦争で勝ったってそれは本当の勝利ではない。戦争をすれば勝っても負けても待っているのは滅びだけだという永井博士の強い想いが込められているのだと私は思った。

（３）青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、福島だけでなく沖縄や京都、北海道など日本全国から約500人が集まり、被爆者の話を聴いたりフィールドワークで、原爆資料館の周りを見学したり、県外の仲間と意見交換をした。特に心に残ったのは、実際に爆心地から1.8㎞のところで被爆した、築城昭平さんという方のお話だ。築城さんは、軍の工場で働いていてその日は夜番だったため、寮で就寝中に被爆したそうだ。急な空襲にそなえて布団を頭からかぶって寝ていたので助かったのである。原爆が落とされてすぐは、黒い霧みたいなものがかかっていて１ｍほどしか見えず、何の物音もしなかったそうだ。築城さんは、このことを『死の世界』と言った。そのあと疎開していた家族に助けられ命を取り留めたが、原爆の被害に今でも苦しんでいるそうだ。

また、どうして争いが起こるのか原因を考えたり、その解決方法を考えたりもした。最後にみんなで一つの大きなパズルを完成させた。ピースフォーラムでは、なかなか体験することのできないことができて、とても勉強になった。



＜平和の泉＞

3　心に残ったこと

長崎に行って私が一番心に残ったのは平和公園にある平和の泉に置かれている石碑に刻まれた原爆で被爆したある少女の手記だ。その石碑には

『のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。』

—あの日のある少女の手記から

と刻まれていた。私はこれを見てとても辛い気持ちになった。この子は何歳だったのだろうとか、家族はどうなってしまったのかなどいろいろなことを考えさせられた。この少女は原爆からは生き残ったものの、この油のようなものが浮いた水を飲んだことで何か病気になるのではないかと、とても心配していたそうだ。もし自分がこの少女と同じ立場だったらとても耐えられないと思った。原子爆弾によって被爆して、どうにか命はあるもののひどいやけどのせいで喉が渇き、水を求めて行けば油のようなものが浮いていてとても飲めるような状態ではなく…でもどうしても水が欲しくて、飲んだはいいものの油のようなものが浮いていたため、自分が病気になるのではないかとおびえながら暮らす。そんなこと考えただけで心が折れそうだ。このような理由から私が長崎で一番心に残ったのは平和公園の泉に置いてある、少女の手記が刻まれた石碑だ。

4　派遣研修に参加して感じたこと

長崎派遣研修に行って感じたことは、戦争と核兵器の恐ろしさと、核兵器廃絶の実現の大切さ、難しさ。そして今当たり前にある平和は決して当たり前なのではなく、私たちの先祖が創ってくれたとても大切で尊い贈り物なんだと思った。そしてこの大切な大切な贈り物を次の世代に、戦争をしてはいけないという想いと共に引き継ぐことが、戦争のない時代に生まれて戦争を知らないまま育った私たちができることであり、私たちがやらなければならないことだと思う。そしてこれから先も、今当たり前のようにある平和が、当たり前に続くことを心から祈る。

平和への小さな一歩

郡山市立安積第二中学校２年　三　浦　楓　大

1　派遣研修への参加に当たって

研修前の僕は、長崎についてカステラやちゃんぽんが有名なこと、出島があること、そして、昭和 20 年８月９日に原爆が落とされたことくらいしか知らなかった。

夏休み前、この長崎派遣事業のことを先生から伺い、ぜひ行ってみたいと思った。原爆が落とされた直後の長崎から現在の長崎へと復興していくまでに、どんな困難や人々の苦労があったのかを、実際に感じることができるのはとても良い機会だと思い、今回の長崎派遣事業に参加した。

2　派遣研修に参加して

（１）長崎原爆資料館

長崎原爆資料館の中には、11 時２分で止まった時計、熱線によって溶けた瓶や硬貨など当時の被害の大きさや様子を表すものがたくさん展示されていた。その中でも、一番印象に残ったのは、被爆された人々の写真だ。真っ黒焦げになった人間の写真、熱線などにより焼け爛れた顔の写真など、見ただけで胸が締め付けられるものばかりだ。これらの写真を見て、僕は心臓を針で刺されたかのような、強い衝撃を受けた。

さらに、長崎原爆資料館には、街に大きな被害をもたらした原爆の模型も展示されていた。その原爆は「ファットマン」と呼ばれていた。模型は３ｍ程でそれほど大きくは感じなかったが、これが落とされたことにより、長崎が一瞬にして焼け野原になったのかと思うと、怒りと恐怖を感じた。そして、原爆は二度と使ってはならない「兵器」であることを改めて認識した。

（２）青少年ピースフォーラム

僕たちは、８月８日・９日の２日間、青少年ピースフォーラムに参加した。１日目は、被爆された築城昭平さんから、当時の様子を詳しく説明していただいた。爆心地から 1.8 キロの場所で体験された、原爆が投下された直後の何もかもが一瞬にして消えてしまった風景や静けさなど、今まで想像したこともない、衝撃的なお話を伺った。とても貴重な経験をすることができた。

２日目は、争いの原因について話し合った。多くの人々と意見交換をし、自分と違う考えに触れることができて、とても勉強になった。その後、その解決策について話し合った。２日間で、多くの地域の方々と交流し、ともに平和について語り合った。その経験を生かし、平和の輪を広げていきたいと思う。

（３）平和祈念式典

僕は長崎原爆資料館ホールから平和祈念式典を見ていた。平和祈念式典は、被爆された方々の合唱から始まった。「もう二度と作らないで、わたしたち被爆者を」というフレーズが深く心に残り、被爆された方々の強い願いを感じた。原爆が投下された時刻に合わせ、11 時２分には、長崎の鐘の音とともに黙とうがささげられた。その時、僕の目には 74 年前の長崎の様子が浮かんでいた。そして「二度と戦争を起こさないでほしい」という願いとともに黙とうは終わった。

実際に参列できなかったのは残念だったが、人々の平和への願いを肌で感じることができ、この平和を保っていくことを決意した。

＜平和祈念像＞

3　心に残ったこと

上の写真は「平和祈念像」の写真だ。像が空へ掲げた右手は「原爆の脅威」を、水平に伸ばした左手は「平和」を、横にした右足は「原爆投下直後の長崎市の静けさ」を、立てた左足は「救った命」を表し、軽く閉じた目は「戦争犠牲者の冥福」を祈っている。この像にこれほどの意味が込められていることを、僕は知らなかった。被爆された方々の強い願いや想いを感じた。

平和公園を訪れて、この平和祈念像を見たのは、長崎原爆資料館などで戦争についてたくさんのことを学んだ後のことだった。そのため、僕がこの平和祈念像を見た時、当時の悲惨な光景が一瞬にして脳裏に浮かんできた。そして、自然と言葉が出なくなっていた。

僕はこの像を見て、様々なことを考えた。この像を作ることを望んだ人々の想い、この像を作った人の想い、そして、ここでこの像を見ている僕たちの想い…。多くの「想い」を背負って平和祈念像は、僕たちを、日本を、世界を見守っている。そんなふうに思えた。そんな人々の「想い」を踏みにじるようなことをしてはいけない。戦争を二度と起こしてはいけない。被爆され、長い間苦しみ続ける人々を、これ以上増やしたくない。そう僕は思って、その場を後にした。

4　派遣研修に参加して感じたこと

僕はこの研修に参加する前は「戦争」とは何も生まず、ただ破壊を繰り返すだけのものだと漠然と考えていた。この研修で多くの方々と交流することで、「この過ちを二度と繰り返してはならない」という人々の強い「想い」を知ることができた。僕たちが訪れた長崎は、原爆が落とされたとは思えないほど綺麗だった。それも人々の強い「想い」があって復興したのだと思った。

僕たちはこの研修に参加して、多くのことを学んだ。ここで得た「知識」を自分一人が持っているのではなく、「情報」として多くの人々へと発信していかなければならない。その「知識」とは、被爆された方々の「想い」でもある。現在、被爆された方々の平均年齢は 80 歳を超えている。時間が経つにつれ、人々の戦争に対する記憶もだんだん薄れてきている。原爆が投下された日や、終戦記念日を気にしない国民も多くなってきているように感じる。このままでは、人間は同じ過ちを繰り返し、真の「平和」は訪れないだろう。だから、僕たちは「想い」を次の世代へと繋いでいかなければならない。家族や友達など身近な人から僕は始めていこうと思う。それが「戦争をなくす」ことや「核兵器を減らす」ことに繋がると信じ、「平和への小さな一歩」を踏み出していきたい。

長崎を最後の被爆地にするために

郡山市立三穂田中学校２年　大　原　真　琴

1　派遣研修への参加に当たって

私は、1945 年８月９日長崎に原子爆弾が投下されたことは知っていた。しかし、それだけだった。また、長崎の原爆被害について深く考えることはなかったため「それではだめだ」と思った。私は原子爆弾が投下された長崎について、また、その被害の詳細を知らなかった。私は研修に参加すると原子爆弾による被害や実際に被害に遭われた方の話を聴けると知った。自分の目と耳で見て、聴いて、感じたことをたくさんの方々に伝えたいと思い研修に参加することを決めた。

2　派遣研修に参加して

私は初めて長崎に行った。綺麗な青い海、緑色の山々、そして街は活気に溢れていた。本当にここに原子爆弾が落とされたのかと疑ってしまうほどだった。

（１）長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原子爆弾による被害が分かる展示物がたくさんあった。長崎に原子爆弾が投下された 11 時２分を表したまま止まってしまった時計、人間の手の骨とガラスが溶けくっついてしまったもの､焼け残った服の一部、投下された恐ろしい原子爆弾「ファットマン」のモデルなど、原子爆弾に関わるものが展示されていた。その中でも私が印象に残っているのは、被害を受けた人々の数々の写真だ。体中に火傷を負い皮膚が焼けただれた男性の写真、原子爆弾による熱線を受け、真っ黒焦げで亡くなっているたくさんの人の写真などがあり、思わず目を背けたくなる痛々しい写真もあった。また、火傷を負った弟を背負い焼け野原となった長崎の街を茫然と立っている兄の写真もあった。数々の写真を見ると、一発の原子爆弾で街や人が一瞬にして変わってしまうことがわかり、原子爆弾がどれほど恐ろしいものなのかがよくわかった。原子爆弾はもう二度と使用してはいけないということをたくさんの人に伝えたいと思った。

（２）青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、全国各地の小学生・中学生・高校生と平和について学習した。この活動で、被爆者の話を聴くことができた。講話をしてくださった築城さんは爆心地から 1.8 キロ離れた学校の寮で就寝中に被爆された。熱線により火傷を負ったが一命をとりとめた。築城さんが話していたことで、印象に残ったことがある。原爆が投下され、仲間と寮を出ると、あたりはシーンと静まり返っていて、まるで世界に２人しかいないような感じがしたそうだ。このことから、原子爆弾によりたくさんの命が一瞬にして奪われたことが分かった。その後も築城さんは、原爆から放たれた放射線に苦しめられた。高熱が出たり、髪の毛が抜けたりしたそうだ。また、周りの人々はどんどん亡くなっていって自分もそうなってしまうのではないかと思っていたそうだ。

年々被爆者の方々は減っていき実際に話を聴けるのはとても貴重なことだ。私は実際に話を聴くことができたため、築城さんから聴いた話をたくさんの人に伝えていこうと思う。

（３）平和祈念式典

８月９日午前 11 時２分、長崎は祈りに包まれた。私は黙とうで「世界から核兵器がなくなり平和になりますように」と願った。しかし、このことを願うだけではだめなのだ。被爆者代表の「平和への誓い」を聴いていると、無残な

＜平和祈念式典合唱の様子＞

体験の話があった。原爆が投下されてかろうじて生き残った人々も苦しんでいるのだと思うと胸が締め付けられた。「もう二度とこのような体験をしてほしくない」という思いが伝わってきた。私に出来ることは何か、願うだけではだめなのだと強く思った。私に出来ること―。

それはとても小さなことなのかもしれない。でも、世界中の人々全員が平和を願って小さな心掛けをすることで世界中の平和に繋がるのだと思った。そして、原子爆弾について次世代へと伝えていこうと心に誓った。

3　心に残ったこと

この写真は、平和祈念式典で行われた被爆者による合唱の様子である。「もう二度と」という曲が披露された。

「いのちも愛も　燃え尽きたことを　もう二度と作らないで　わたしたちたち被爆者を」

という歌詞が強く印象に残っている。一発の原子爆弾により、長崎は一瞬にして焼け野原になり、たくさんの尊い命が奪われてしまった。その命の中には希望に満ち溢れ、瞳がキラキラと輝いていた子どもたちも含まれていたと思うと胸が痛い。74 年前、原子爆弾が投下された時、人々はどんなに恐ろしく、苦しい体験をしたのだろうか。それは私たちには分からない計り知れないものだっただろう。原子爆弾が投下された長崎は愛も希望も人々の命も燃え尽きてしまっていた。焼け野原となり、たくさんのものが燃え尽きてしまった長崎を見た被爆者の方々はどのような気持ちだったのだろうか。もし自分の身に同じなようなことが起こったら―。想像も出来なかった。

たくさんの人が願っている「長崎を最後の被爆地にする」という願い、「もう二度と被爆者を出したくない」という想いがとても伝わってくる合唱だった。

私も長崎を最後の被爆地にするために出来ることをしようと思った。私は平和祈念式典で感じたことをたくさんの人々に伝え、被爆者の合唱団がある事を知ってもらえるようにしたい。また、一刻も早い核兵器の廃絶を願っている。

4　派遣研修に参加して感じたこと

私はこの派遣で、原子爆弾の恐ろしさや、平和の尊さを知ることが出来た。

原子爆弾により、たくさんの尊い命、たくさんの人々の日常、元気に迎えるはずだった子どもたちの明日を奪ったことを決して忘れてはいけないのだと思った。

私は今まで「戦争なんか」とどこか他人事のようにしていたような気がする。

私は今回の派遣研修を通して考えを変えることができた。戦争を、原爆被害を他人事にしてはいけない。たくさんの人々が苦しんだことを忘れてはいけない―。

私は今回の研修で被爆者の話を聴くことができた。年々被爆者の平均年齢は上がっていき、実際に体験した人の話を聴ける機会は減っていくという。貴重な体験ができた私はその話を伝えなければならない。家族、友人、地域の方々、次世代を担っていく人々―。たくさんの人に原爆の恐ろしさ、平和の尊さを伝えていく事が今の私にできることだと思う。そして、今の平和な状況がいかに幸せなものなのかを知ってもらえるよう努力していきたい。

そして、核兵器を持っている国にいつか想いが届くように願っている。

いつか世界中の人々が平和な世界で生活し、世界が愛と希望と笑顔で満ちあふれる日が来るように私が出来ることを頑張っていこうと思う。

長崎が最後の被爆地になるように―。

私たちが伝えていく

郡山市立逢瀬中学校２年　橋　本　圭　祐

1　派遣研修への参加に当たって

今回長崎派遣事業に参加しようと思った動機は、ニュースで今でも戦争をしている国があることを知って、なぜ争いは起きるのだろうと思っていた。そのとき、この派遣研修を知ってその答えが見つかるかもしれないと思い、参加を決めた。

核兵器については、長崎・広島に投下されたということは知っていたが、詳しい威力や被害の規模などは把握していなかったため、事前学習として昨年の資料をみて調べてみた。すると自分が思っていた以上に、威力や被害が酷く、たくさんの人が原子爆弾の投下によって苦しめられたのだと感じた。それなのに、多くの国がいまだに核兵器を所有しているという状況に疑問を抱いた。なぜ核兵器を所有するのだろうと、その答えを見つけだすことも理由の一つだった。

2　派遣研修に参加して

（1）原爆資料館

館内に入ると最初に目に入ってくるのが、11 時２分の時を刻んだまま止まっている時計。それを見ると、原子爆弾の威力がどれほどだったかが伝わってくる。そしていかに一瞬にして原子爆弾が炸裂し尊い命を奪っていったのかをその時計は語っているようだった。

少し進むと、1945 年８月９日 11 時２分長崎の上空で炸裂したファットマンと呼ばれているプルトニウム爆弾のレプリカが展示していた。この小さな爆弾が一瞬にして長崎の街を消し去ったと思うと胸が締め付けられ、それと同時に、この小さな爆弾が尊い命を奪ってしまったという事実に、恐怖感が胸の奥からこみ上げてきた。

（2）平和公園

公園内に入ると自分の目を疑った。本当にこの公園で原子爆弾が炸裂したのかと思うほどとても綺麗で美しかった。ここが本当に被爆地なのだと認識したのは、原子爆弾によって崩壊した刑務所の跡地を見てからだった。鉄骨がむき出しとなったその刑務所跡地は、たった今炸裂したのかと思うほど残酷な姿をしていた。そしてこの刑務所にいた人たちはなにも知らず一瞬にして命が奪われたのかと思うと心が痛くなり、胸が締め付けられた。

少し進むとそこには平和の泉があった。被爆した方々は水を求めながら亡くなったという。その方々の冥福を祈るために作られたのが平和の泉である。

（3）青少年ピースフォーラム

参加する前に私は、同じような考えを持っている人しかいないと思っていた。しかし実際に活動してみると、全く違う考えとまではいかないが、私が思っている以上に、いろいろな意見が飛び交い「どうしたら戦争（いじめ）がなくなるか」「なぜ戦争（いじめ）がおこるのか」など、私の考えになかった意見を聞くことができ、自分から意見を発することによって自分でも気づかなかった根本的な問題が見つかったような気がした。

また実際に被爆した方のお話を聞くことができ、どれほどの威力だったのかを資料だけでは分からないところまで詳しく知ることができた。そして実際に被爆した人が少なくなっている今、私たちが伝えていかなければと思った。

＜原子爆弾落下中心地碑＞

3　心に残ったこと

この中央に建っている石碑は、この上空で原子爆弾が炸裂したことを表している。その当時はこの周辺はとても酷い状況だっただろう。たしかに、この石碑は原爆の悲惨さを伝えていると思う。しかし、その周りにある被爆者を忍び折られた色とりどりの折り鶴、祈りを捧げるたくさんの人々から、この石碑は、被爆者を思う気持ち、被爆後手を取り合って復興に向かっていった長崎県民の絆、それらを伝えているようだった。私は原子爆弾によって亡くなった方々に、今の長崎の姿を見て欲しいと強く思った。

「あの美しかった長崎を、こんな灰の丘に変えたのはだれか？…私たちだ。おろかな戦争を引き起こしたのは私たち自身なのだ。」

この言葉は、被爆しながらも、ほかの被爆者の救護活動を続けた永井隆博士の言葉である。永井博士は被爆後の長崎を「灰の丘」と例えている。どれほどの被害だったのかが手に取るようにわかるだろう。分かるからこそ被爆者の方がどれほど辛い思いをしてきて、どれほどの人が長崎の平和を思い「美しかった長崎」を蘇らそうと思ったかが伝わってくる。その事実を知った私たちこそが被爆者の方の代わりに原爆・戦争の酷さ、平和の尊さを伝えて行かなければと思う。

4　派遣研修に参加して感じたこと

今回、長崎派遣事業に参加して、平和というものは愛によってつくられるという私の中で一つの結論にたどり着いた。それを感じることはたくさんあった。被爆し、焼け野原となってしまった長崎を美しい元の長崎へと戻したのは長崎を思う長崎県民、日本国民、そして世界中の人たちの愛の力である。いま、一部の国では戦争が行われているが、色々な国が交流し合って、戦争が行われないように努力していることは、お互いを愛し合おうという愛の力である。

しかし、全世界が核兵器廃絶や戦争を無くそうと向かっているわけではない。そして戦争を実際に経験した方が少なくなり、悲惨さを伝えることが難しくなっているのが現状である。だからこそ今回派遣研修で学んだことを活かし、戦争、核兵器に対しての知識が少ない人に事実を伝えるのが今後、平和のために必要だと思う。

研修前、戦争が起こる理由は領土、金銭問題などからだと思っていた。しかしピースフォーラムに参加していろいろな人たちの意見を聞き、自分の意見をよく考え直すということを繰り返すうちに、宗教間のトラブルや拉致問題などいろいろな意見もあり、自分が考えている以上にいろいろな理由があるのだと思った。

長崎派遣に参加して、自分の考えや思いが変わりとても良い経験になったと思う。

戦争のない平和な世界に

郡山市立片平中学校２年　川　崎　瑞　歩

1　派遣研修への参加に当たって

1945 年８月の６日と９日に原子爆弾が投下されたということを授業で習った。しかし、どれくらいの人が亡くなったのか、どれくらいの威力だったのかということは知らなかった。これまで、戦争は怖いもの、と思っていて私は目を背けていた。

しかし、長崎派遣の参加者を募集すると聞いたとき、これまでと同じように目を背け続けるのではなく実際に被爆地である長崎に行き、自分の目で見ることで戦争に対する考え方が変わると思いこの研修に参加した。また、人見知りな私がこの研修に参加することで何か変わることができるかもしれないと思ったのも動機の一つである。

2　派遣研修に参加して

（1）平和公園

この公園は、悲惨な戦争を二度と繰り返さないようにという誓いと、世界平和への願いを込めて作られた公園である。

特に、公園内にある「平和の泉」が心に残った。当時､「水を」「水を」と水を求めて亡くなっていった多くの方々のために建設された泉である。

この泉は私も写真で見たことはあったが、実際に見ると多くを考えさせられた。

（2）原爆資料館

原爆資料館には、11 時２分で止まった時計などがあった。被爆したビンに触れてみると、原形は無くねじれ曲がっていて、ゴツゴツとしていた。

硬いビンがこんなにも曲がっている状態を見るのは初めてだった。

また､長崎に投下された爆弾「ファットマン」の模型を見た。全長 3.6 メートル、重さ 4.6 トンのプルトニウムの爆弾だ。その爆弾で長崎が一瞬にして変わってしまったのだと思うと、とても怖かった。

その他にも、原爆が投下される寸前まで使用していた物などが展示してあり、本当に一瞬の出来事だったのだろうと思った。

（3）青少年ピースフォーラム

私たちと同じ世代の人たちが、全国から大勢集まって開催された。

１日目には、被爆者の築城昭平さんの講話を聞いた。当時 18 歳の築城さんは、爆心地から 1.8km にあった学校の寮で被爆された。全身にやけどを負い、特に左腕と左足先は重症だったようだ。74 年前の長崎の様子をお話ししてくださり、私たちは改めて原爆の恐ろしさを知った。

築城さんは、「世界の人々に核兵器を使うとこんな恐ろしいことが起こるということを知ってほしい。核兵器の怖さを知ってほしい。」と願っていた。

２日目は、「争いの原因って何だろう？」というテーマをもとに話し合いを行った。自分の国を強くしたいから、相手の国よりも上の立場でいたいからなどの意見が挙がった。

最後の全体発表では、割り当てられたピースにグループごとの意見を書き、みんなで平和のパズルを完成させた。

＜奉納された千羽鶴＞

3　心に残ったこと

上の写真は、平和公園内にあった千羽鶴の写真だ。私たち、郡山市中学生長崎派遣団も千羽鶴を奉納した。

千羽鶴は、平和の象徴であり、平和公園だけでなく原爆資料館内にもたくさんあった。全国から奉納されている千羽鶴を見て、「平和を願う人がこんなにたくさんいるのだと」感じた。

平和を願う人がこんなにいるなか、世界にはまだたくさんの核兵器を保有している国がまだ10か国以上あり、約1万5,000発ある。国のため、という理由で核兵器の保有を許してもいいのだろうか。「もう、二度と戦争をしてほしくない」「核兵器の怖さを知ってほしい」と思っている人の願いは届くのだろうか。私は考えた。

しかし、全員が同じ意見ではないので、お互いがお互いの意見を尊重して考えることが大切だと思った。

4　派遣研修に参加して感じたこと

私は、この4日間を通して学校では学べないくらいたくさんのこと、戦争の悲惨さ、長崎の復興について学ぶことができた。研修の前までは、「戦争は怖いから」という理由で戦争について関わってこなかった。

しかし、実際に行ってみると74年前の日本について知らなくてはいけないこと、伝えなくてはいけないことが多くあり家族や友達に伝えていこうと思った。これから、報告会やパネル展がある。地域の人にも私たちが長崎で学んできたことを知ってもらうことができる良い機会だと思う。「伝えてください」。私たちが何度も言われた言葉。今の状況、被爆者の願いを伝えていく、郡山市長崎派遣団の一人としての私の使命なのだ。

平和への想い

郡山市立喜久田中学校２年　宗　像　遼　大

１　派遣研修への参加に当たって

長崎には、原爆がおとされた。実際に戦争を体験していない僕には、その事しかわからなかった。そのため、この長崎派遣事業は、戦争を知らない僕が戦争について深く学べるチャンスだと思った。

僕は８年前の原発事故で故郷に帰ることができなくなってしまった、この事故と原爆からの復興は少なからず関係があると思った。

２　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館・平和公園

原爆資料館では、原爆投下時刻の午前 11 時２分で止まってしまったままの時計や、原爆による被害などが当時の写真などで、とてもリアルな資料として残っておりたくさん展示されていた。そんな数多くの資料の中でも、長崎に落とされた原爆のレプリカ「ファットマン」が、独特のオーラを放っていた。こんなに小さなものでも何万人もの命を奪うことができる。そう思うと、原爆は本当に怖いものだと改めて思った。

平和公園では、平和祈念像を見た。あの像の格好には訳がある。その中でも僕は平和祈念像の右足が「原爆投下直後の長崎の静けさ」を表しているというのが、とても印象的だった。

（２）青少年ピースフォーラム

ここでは、２日間にわたり戦争の悲惨さや、戦争は二度と起こしてはいけないものだという事を改めて学んだ。

１日目には、実際に戦争を体験した被爆者の方から、当時の事についてお話を聴かせていただいた。被爆者の方のお話は、資料館で見たものより生々しさを感じた。その後のフィールドワークでは、原爆に関する場所を見た。追悼平和祈念館では、追悼空間があった。そこでは、今までに原爆の被害によって亡くなられた方の名前が記された本がたくさん保管されていた。

２日目には、グループでなぜ戦争が起きてしまうのかについて考え、みんなでその解決策についても話し合った。それぞれにたくさんの考えがあり、なかなか一つの意見にまとまらなかった。僕たちのグループの最終的な考えは、「視野を広げ全体を見る」というものにまとまった。これは、自分の事ばかりだけでは無く、視野を広げて見れば周りの人たちの考えがわかり、問題解決に繋がるのではないかという考えからだ。

（３）平和祈念式典

僕は、式典に参列することができた。今までテレビでしか見たことがなかったが、実際にその場にいるとただならない緊張感を感じた。

式典では、長崎平和宣言、平和への誓いなどを聴く事が出来た。この式典の中で特に印象的だったのは、献水だ。原爆が落とされたとき、人々は水を求めていた。しかし、原爆が落とされた直後の水には、油が浮き、とても飲めるものではなかった。だからこそ、せめてもの思いで、きれいな水を求めて亡くなっていった人たちに、水を捧げるというものだった。

＜平和祈念像＞

3　心に残ったこと

一番心に残っているのは、長崎平和宣言である。最初に読まれた詩の一部に、「人は忘れやすく弱いものだから あやまちをくり返す だけど… このことだけは忘れてはならない このことだけはくり返してはいけない どんなことがあっても…」という部分があった、この詩は、原爆により家族を失ってしまった、当時 17 歳の女性が書いたものだ。この詩のこの部分が、なぜ心に残っているかというと、この長崎を世界で最後の被爆地とし、世界の誰にも同じ気持ちを味わってほしくないという強い気持ちを感じたからだ。

4　派遣研修に参加して感じたこと

派遣研修に参加し、一発の原子爆弾によりたくさんの命が奪われたこと、生き残った人の体と心に深い傷を負わせたことを知り、戦争は恐ろしいということを深く知ることができた。

僕は、未来に起こることは知ることができない。戦争が絶対に起きないとも言い切れない。しかし、この先もずっと平和な世の中であってほしい、そう思っている。この先も戦争が起きないように、この派遣研修で学んだことをたくさんの人に伝えていきたい。そして、戦争を二度とくり返してはいけないという思いをたくさんの人たちに抱いてもらいたい。

長崎での誓い

郡山市立熱海中学校２年　本　田　芽　愛

1　派遣研修への参加に当たって

最近、ニュースや新聞で北朝鮮でのミサイルの打ち上げ実験の記事をよく目にする。今でもミサイルが世界の上空を飛び、ましてや日本の上空を飛んだことがあると考えるととても恐ろしい。また、紛争や武器を使った争いがまだ続いている国もある。戦争に対する思いは国によって、また人によってもそれぞれ違うのだ。

私はこの研修で、戦争について考え、学び、そして平和であることへの感謝の気持ちを忘れずに持ち続けることの大切さを学びたいと思い、参加を希望した。

2　派遣研修に参加して

（1）長崎原爆資料館

原爆資料館には、長崎に投下された原子爆弾による被害の写真や資料が展示してあった。

11 時２分をさしてぐにゃりと曲がった状態で止まっている時計。熱線によって溶けてしまった瓶や鍋の蓋など、数多くの貴重なものが展示されていた。中には、「ファットマン」という原子爆弾の模型があった。これが多くの尊い命を一瞬で奪ったのか、と思えないほどとても小さなもので、とても驚いた。

展示物で特に印象に残ったものは、被爆した人々の写真だ。皮膚がえぐれ、筋肉や骨まで見えていて、原爆の恐ろしさに恐怖を感じ、胸が締め付けられた。

（2）青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、日本各地から様々な世代の方々が集まり、原爆や平和について学んだ。一日目は、被爆された方のお話を聴いた。被爆された当時、高校生だったそうだ。昼間で明るかった街が一瞬にして真っ暗になり、辺り一面、壊れた建物の残骸であふれていたそうだ。左腕にひどいやけどを負い、何度も手術を受け、その後もひどい後遺症に悩まされたそうだ。「とても憎かったし、悔しかった」とお話されていた。原爆の恐ろしさを改めて感じ、心が痛んだ。

二日目は班に分かれて「戦争はなぜ起きるのか」「その解決策は」という課題について考えた。私たちの班では、「相手のことを考えず、自分のことばかり考えてしまうと欲が出てしまう」「他国のことをよく知り、広い心で相手の考えを尊重する」という意見にまとまった。班の人たちと交流し、意見交換したことで、原爆や戦争に関する知識を分け合うことができ、より深く学ぶことができた。

（3）如己堂・永井隆記念館

昭和 20 年８月９日、午前 11 時２分に原子爆弾が落とされ、勤務中に被爆した永井隆博士は自らも大けがを負い、何度も意識を失いながらも救護活動を行った。しかし、病状が悪化し、寝たきりになってしまった博士は、如己堂に移り住む。「如己堂」の意味は、「己の如く隣人を愛せよ」という意味がある。ここで寝たきりで原爆による病気の研究をしたり、「長崎の鐘」や「この子を残して」などの本を執筆し、原子爆弾の恐ろしさや戦争の愚かさ、命と平和の大切さを訴えた。また、再び争いが起きないことを願って、「平和を」という言葉を半紙に 1,000 枚書き、世界中の人々に送った。共に平和な世界になるよう努力していこう、と訴えたのだ。

私は、平和を願う思いを引き継ぎ、伝えていかなければいけない存在であると強く感じた。

＜平和の泉＞

3　心に残ったこと

心に残ったことは、平和公園の平和の泉に建てられた石碑を見たことだ。その石碑には、「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と刻まれていた。これは、原爆の熱線により体内まで焼きただれてしまった当時小学４年生の少女が、水を求めて探し回ったが、どこの水にも油のようなものが浮いていて、とても飲めるような水ではないのに、どうしても欲しくて飲んでしまった。という今ではとても考え難い事実だ。その少女のほかにも、水を求めてうめきながら亡くなっていった人々がたくさんいたそうだ。そうして犠牲になった人々に水を捧げて冥福を祈るため、この泉が造られたそうだ。

現在では、おいしい水をいくらでも飲むことができるが、決して当たり前のことだと思わず、大切にしなければならない。平和も同じことだ。一人ひとりが平和について考え、行動することがとても大事だと思う。

4　派遣研修に参加して感じたこと

一発の原子爆弾で、数多くの尊い命が一瞬で奪われてしまった。被爆しながらも生き残った人々は、後遺症や苦しい病と闘いながら今も懸命に治療を続けているという実態を知った。また、原爆資料館を通して、原爆の威力やその当時の状況なども知ることができた。

私は、この４日間の貴重な経験を通して「長崎を最後の被爆地に」という想いを引き継ぎ、戦争や平和に関する知識を一人でも多くの人に伝えていくことを心に誓った。

平和を願って

郡山市立守山中学校２年　村　上　寛　奈

1　派遣研修への参加に当たって

まだ私が幼い頃、戦争を題材にしたアニメを見てから、恐怖を感じ、戦争に対してずっと目を背けてきた。しかし、６年生の頃に授業で戦争や原爆などについて学んだ。それから、実際はどんな状況だったのか、もっと知りたいと思った。「百聞は一見に如かず」と言うことわざもあるし、自分で現地へ行って、見て、その事実を詳しく知りたいと、日に日に強く思うようになった。幼い頃、アニメを見ただけでも、もの凄い恐怖を感じた戦争。その時代を生きていた人々にとって、どれ程の苦痛だったかは、計り知れない。そんな怖い出来事を、この先また起こしてはいけない。今、自分にできることは何かと考え、今回の長崎派遣事業の参加を希望した。

2　派遣研修に参加して

（１）被爆者体験講話

青少年ピースフォーラムの１日目。被爆者から、直接話を伺うことのできる、被爆体験講話があった。講話をしてくださったのは、築城昭平さん。被爆当時は 18 歳。今や 90 歳を超えているのだが、年齢を感じさせない、元気で若々しい方だった。そして、講話が始まった。築城さんはそれまでと一変して、静かに語り始めた。私たちに、力強く訴えかけてくるその声には、悲しみをにじませていた。

私は講話を聴いて、印象に残った言葉がある。

「もの凄いやけどを負っていて、顔もべらべらだった。人間の格好をしているだけだった。」自分で体験したからこそ語れる迫力を感じた。自分の見た情景を、自分の思ったままに表現するからこそ、築城さんの受けた衝撃が生々しく伝わってきた。私は、この状況を思い浮かべて鳥肌がたった。まるで、ホラー映画のようだ。しかし、これは実際の話である。実際にこんな嘘のような、恐ろしいことが起こったのだ。きっと、今の平和な時代を生きる私たちには、体験することのない、現実とは程遠い出来事だ。昔、本当にあった話。やはり、実感がわかない。だが、やっと戦争の怖さが、原子爆弾の真の恐ろしさが分かった気がした。

（２）平和祈念式典

私は、平和祈念式典に参列した。暑いにもかかわらず、大勢の人が集まっていた。外国の人、座る席が足りずに立っている人、様々な人が真剣な眼差しで、式典を見届けていた。

初めに、被爆者合唱が行われた。その歌詞である「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」。私の心に、とても強く、響いた。切ないながらも芯の通った声で歌いあげる様子から、心の底から願っているのだということを感じた。

11 時２分になると、皆で一斉に黙とうをした。74 年前、いつもとなんら変わりのない日常が、一発の原子爆弾で、一瞬にして、街ごと破壊された。決して変わることのない過去。なかったことにはできないけれど、二度と起こさなくすることはできる。74 年経っても変わらず、「核兵器廃絶」を訴え続けている。しかし、世界には核兵器が約 14,000 発も存在している。この事実に、私は落胆した。「今でも、傷が癒えていない人がいるのに。」、「今でも、苦しみ続けている人がいるのに。」、「いち早く、核兵器廃絶を実現していかなければ。」私はそう思い祈ることしかできなかった。

＜平和への想い＞

3　心に残ったこと

この写真は、平和公園内にある平和の泉と少女の手記の石碑だ。私は、石碑を見た後に平和の泉を見たとき、切なさを感じた。

「のどが乾いてたまりませんでした
　水にはあぶらのようなものが
　一面に浮いていました
　どうしても水が欲しくて
　とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

この少女もきっと、あぶらの浮いた水なんて、飲みたくなかったはずだ。しかし、そんな水を飲んでしまうほど、苦しかったのだろう。原爆のため体内まで焼けただれた被爆者。「水を、水を…」とうめきながら、大勢が亡くなっていった。そんな方々に、水を捧げ、冥福を祈り、そして恒久的な世界の平和を祈念して建設された平和の泉。日本だけじゃなく、外国の名水も贈られてきているようだ。透き通った綺麗な水で溢れている平和の泉を見ると、水さえ好きなように飲めなくしてしまう原子爆弾があってはならないと、再認識させられる。

今、私たちは水について何かを考えることはない。あたりまえのように、暑いといって水を飲む。のどが渇いたといって、水を飲む。ごくごくごくごく、好きなだけ。しかし、これは決してあたりまえではなかったのだ。水が綺麗だという日本でも、あたりまえにあてはまらず、自由に飲むことのできない時代があったということを、初めて知った。そんな歴史をつくってしまった原子爆弾を恨めしく思った。

4　派遣研修に参加して感じたこと

私は、今回の長崎派遣事業で、たくさんの貴重な経験をさせていただいた。長崎では、戦争について深く考えさせられた。今までの私は、戦争や原子爆弾についての知識はあったが、被爆者については考えたことがなかった。きっと、私の他にも同じような人がいるだろう。また、戦争について考えたことがない人や関心がない人もいるのではないだろうか。私たちはまず、知らなければいけない。戦争について、原子爆弾について、被爆者について。その恐ろしさを、悲惨さを、平和の尊さを。

しかし、被爆者の高齢化が年々進んでいるのが現状だ。だからこそ、私たちは一人ひとりが戦争についての考えを深め、より多くの人に平和の尊さを伝えていかなければならない。そうすることで、「世界中から核兵器がなくなり、戦争のない平和な世界をこれからも何十年、何百年、何千年と守り続けていきたい」という被爆者の想いを実現できるのではないかと思う。

最後に、今回の長崎派遣事業に参加し、有意義な研修ができ、本当によかったと思う。先生方や協力してくださった方々に心から感謝したい。

もう二度と…

郡山市立高瀬中学校２年　山　口　　航

1　派遣研修への参加に当たって

僕は小学６年生の春、家族で広島に行った。日本人として一度は被爆地を見ておきたいという父の考えからだった。原爆ドームや原爆資料館に行き、これまで曖昧だった戦争のイメージが現実味を帯び、平和への想いが強くなった。今回、長崎派遣事業への参加を希望したのは、もう一つの被爆地を見て、日本の平和だけではなく、世界の平和のためにできることは何なのかということを考えたかったからだった。

2　派遣研修に参加して

（１）長崎の空気

僕が長崎の地に第一歩を踏み出した時、長崎は暑かった。郡山とは違った息苦しいような暑さだった。周りを見渡すと、透き通った青い海、力強い緑の山。たくさんの自然にあふれていて美しかった。初日は長崎の中華街で昼食を食べ、長崎の街並みを観てまわった。長崎の方言で「ぶらぶら歩くこと」を「さるく」というらしい。僕たちは案内を聞きながら「長崎さるく」をしていった。周りが山に囲まれている長崎市は坂が多い。そして道が狭い。車だと小回りが利かなく、自転車だと坂を上るのが辛いので、バイクに乗っている人が多いらしい。街中で何度も見かけた。

長崎では信号がない横断歩道が多かった。渡る時、危ないのではないかと思ったが、そんなことはなく、手を上げると車が止まってくれる。長崎で出会った人全員がそうだった。親切な人、優しい人がたくさんいるのだと感じた。

（２）如己堂、永井隆記念館

２日目の午前、僕たちは如己堂と永井隆記念館を見学した。永井博士は、自らも被爆して妻を亡くしながらも、被爆した患者の診療をし、後世に原爆のことを伝える本を 17 冊も書き、長崎市の最初の名誉市民になった人である。しかも原爆投下の３か月前、白血病で余命３年と診断されている。それなのになぜ、こんな偉業を成し遂げることができたのか。それは博士が大事にした言葉に表れている。「如己愛人」。己の如く人を愛せよ、という意味だ。聖書にある言葉で、博士が暮らした如己堂の名前の由来にもなっている。博士はこの言葉を、生涯にわたって実践したのだろう。

（３）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

８月９日の午前、平和祈念式典に参列した。かなりの暑さの中、式典にはたくさんの人が参列していた。始めに被爆者合唱や原爆死没者名奉安があった。そして午前 11 時２分。74 年前、原爆が落とされた時刻に、全員で黙とうをささげた。この瞬間、だれもが恒久平和を願っているのだと感じた。「もう二度と核兵器を使ってはいけない。」そんな想いを僕は胸に刻んだ。

平和祈念式典の中で、僕が最も印象に残ったのは被爆者代表の方の話だ。原爆の悲惨さ、被爆者の想いを直接聞くことができ、絶対に核兵器を廃絶し、戦争をなくさなければいけないとより一層強く思った。この被爆者の方の話が終わった時、割れんばかりの大きな拍手が平和公園を包んだ。僕は拍手をしながら拍手を聞いて、こんなにみんなの平和への想いが強いのなら、きっといつか世界中が平和になる、と心の底から安心した。

＜争いをやめるには＞

3　心に残ったこと

僕がこの長崎派遣事業で心に残ったのは、２日目と３日目の午後に行った青少年ピースフォーラムだ。上の写真はみんなで３日目の活動で作ったパズルで、争いをやめるためにはどうすればいいのかを各班で話し合って書いた。ピースフォーラムの班は、ピースボランティア（通称ピーボ）の人や、様々な地域から来た学生で構成されていた。学年、学校がばらばらだったにもかかわらず、平和への意見を出すことができたのは、やはり、みんなの考えていることが一緒だからなのだろう。すぐに打ち解け、話し合うみんなの姿を見て、この団結力があれば争いなんて簡単にやめられるのではないかと思った。相手と友好な関係を築けても、時々喧嘩をしてしまうのは仕方ないかもしれない。でも、殴り合いには発展せずにきちんと謝って喧嘩を終わらせることができたら、なんて素晴らしいのだろう。ピースフォーラムに参加して、そんなことを感じた。

4　派遣研修に参加して感じたこと

原爆投下から 74 年たち、原爆死没者名簿登載者数は 182,601 人になった。だんだんと、戦争が起きていた時代に生きていた人がいなくなってきている。終戦から 74 年。親の世代は戦争を知らないし、祖父や祖母の世代だって、生まれていなかったり幼かったりして戦争が知らない人が増えてきた。被爆者となると、なおさら少ない。そのうち、日本が戦争をしていた時代に生きていた人はいなくなってしまう。そんな今、被爆者の方から直接話を聞けたのは幸運だった。僕も原爆や戦争の惨状は本や写真で知ってはいるが、実際に聞くとその時のその人の気持ちがはっきり想像でき、胸が痛くなった。もう二度と原爆の被害者を増やしてはならないと、強く感じた。

遠い未来、もしかしたら日本に原爆が落とされたこと、戦争をしていたことさえも忘れ去られてしまう時が来るかもしれない。その状況になってしまえば、人は間違いなく同じ過ちを犯してしまうだろう。もう二度と核兵器を使わないために、これからの世界の恒久平和のために、元号が平成から令和になった今、これからの世界を作っていく僕たちが戦争のことをもっと知るべきだと思った。全世界が平和へと向かっていけるように、まずは僕の周りから平和を広げていきたい。

戦争のない平和な世界を

郡山市立二瀬中学校２年　大河内　玲　音

1　派遣研修への参加に当たって

1945 年８月９日、長崎に原子爆弾が投下されたことは知っていたが、どのくらいの人々や土地が被害を受けたのかはあまり知らなかった。またこの時期になるとテレビ報道などで、戦争について考える番組が流れてくる。しかしテレビ越しでは、長崎の歴史を自分の目に焼き付けることはできない。そこで私は、原爆の悲惨さを実際に現地に行って自分の目で確かめたいと思った。さらに、被害を受けた人々の想いを聞いて、みんなに伝えたいと思い、この「長崎派遣事業」に参加することを決意した。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館

原爆資料館では、被爆の惨状をはじめ、原爆が投下されるに至った経緯、および核兵器開発の歴史、平和希求などストーリー性のある展示を行っている。ここには、「ファットマン」というプルトニウム型の原子爆弾が展示されていた。これは､広島に投下された「リトルボーイ」というウラン型の原子爆弾より大きいのだ。実物の大きさの模型を見て驚くばかりだった。この原子爆弾一発であんなに被害がでるとは、私の想像を遥かに超えていた。

長崎の街も命も一瞬にして葬られたことを知り、改めて原子爆弾の恐ろしさを感じた。そんなことが二度と起こらないように、平和を願うばかりだ。

（２）永井隆記念館

永井博士は、戦争によって家族を失い、生きる希望をなくしていた子どもたちの心を豊かにしようと、如己堂のそばに「うちらの本箱」と名付けた小さな図書室を作り、子どもたちにたくさんの本を読ませた。博士の夢であった「長崎市永井図書館」が建てられたのは、博士の亡くなった翌年の昭和 27 年のことだ。その後、昭和 44 年には「長崎市立永井記念館」と名前を変えた。そこには、博士の書いた原稿や遺品なども展示されていた。そして平成 12 年の４月、「長崎市永井隆記念館」として新しく建て替わり、博士の如己愛人の精神と恒久平和の願いを今に伝えている。

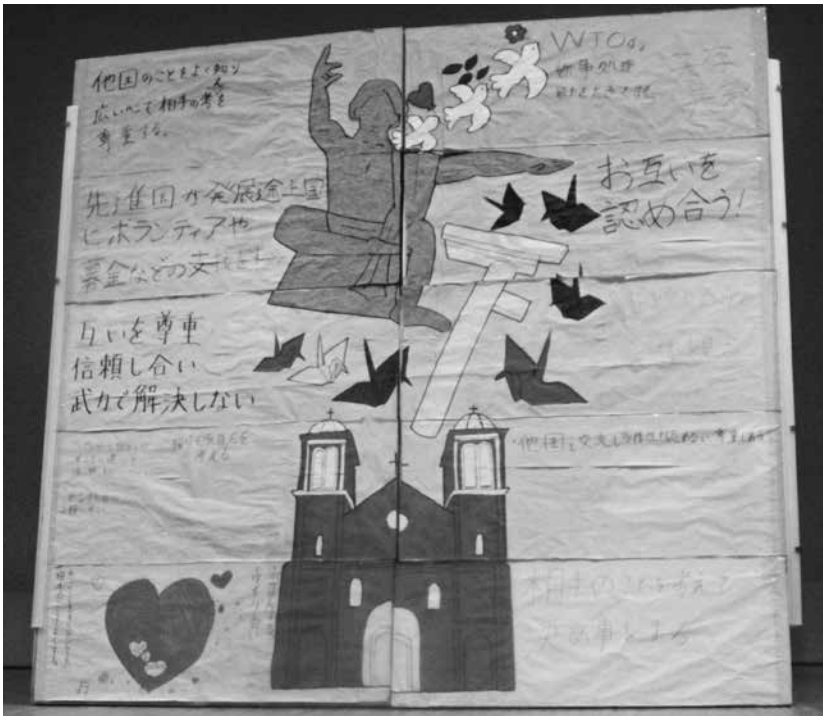
（３）平和祈念式典

今回の平和祈念式典は、天気にも恵まれ青い空の下で行われた。私は、長崎原爆資料館の館内で式典に参加した。その中で、被爆者の方々の「もう二度と」という合唱を聴いた。この歌の中には、

「もう二度と作らないで　私たち被爆者を
　　あの忌まわしい日を　繰り返さないで」

という歌詞があった。もう二度と原爆による被害を繰り返さないでほしいという被爆者の願いが、強く伝わってくる。あの青い空でさえ、悲しみの色に変ってしまう。そんな悲しみを、消すことはできない。だからこそ、私たちが被爆者の想いを受け取り、みんなに伝え続けていこうと強く思った。

午前 11 時２分に１分間の黙とうを捧げた。この時刻に何万人もの命がこの世から奪われたあの日。「今日のお昼ご飯は何だろう？」「午後は友達と遊ぼう」…。人々は、どんなことを思っていたのだろう。爆発後、苦しんでいる人を見てどれほど胸が痛くなっただろう。そんなことを考えさせられる、短いようで長い１分間となった。もう二度と戦争を起こさないでほしいと願い続けることをここに誓う。



＜平和パズル＞

3　心に残ったこと

今回の「長崎派遣事業」で印象に残ったことは、「青少年ピースフォーラム」である。ここでは、全国各地の小中高生が集まって、平和について考えた。グループに分かれて、「なぜ戦争が起こってしまうのか？」「戦争を起こさないためにはどうしたらよいのか？」などについてのテーマに沿って話し合った。

この写真は、グループで話し合った結果をパズルにして組み合わせたものである。グループごとに様々な意見が出された。私たちのグループでは、「お互いを認め合う」という意見を発表した。他のグループの意見も聞くことができて、さらに考えを深めることができた。

また、この活動を通じて全国各地の小中高生と交流し、親睦を深めることができて大変有意義なものとなった。他地域の魅力や自分の趣味などについても意見を交わした。「青少年ピースフォーラム交流会」では、グループに分かれて、他県の人やピースボランティアの皆さんと食事をしながら楽しい時間を過ごした。充実した貴重な２日間となった。

4　派遣研修に参加して感じたこと

私は、この４日間の「長崎派遣事業」を通じて、郡山市の各中学校の皆さんと交流することができて大変よかった。初めは不安な気持ちの方が大きかったが、会話が増えることで安心して研修に参加することができた。研修中大変なことがあっても協力し合い、一人ひとりの活躍の場が広がっていったと思う。

さらに、原爆の悲惨さを自分の目で確かめることができた。長崎へ原子爆弾が投下されたことによって受けた被害がどれほど大きいものなのか。たった一発の「ファットマン」によって、取り返しのつかないほど、たくさんの命が奪われてしまった。なぜ罪のない人々の命が奪われなければいけないのだろうか。そんな様々な感情が私の中に湧いてきた。今は戦争がなく平和な時代だが、再び戦争が起きたらと思うと恐ろしくなる。戦争を経験していない人や知らない人がたくさんいるからこそ、長崎に赴いた私たちが、戦争の恐ろしさを伝え続ける必要があるのだ。「青少年ピースフォーラム」での被爆者の話でも、「被爆者の貴重な話をみんなに伝えてほしい」とおっしゃっていた。その思いを受け取り、二度と原爆による悲劇を起こしてはならないと、強く訴えていきたい。

それが、「平和」への第一歩だと私は考える。

平和へのバトン ～つなぐ想い～

郡山市立郡山第一中学校２年　武　田　隼　輔

1　派遣研修への参加に当たって

「福島は今、安全ですか？」

僕がこの研修に参加しようと思ったのは、この小さな出来事からだった。ある日、旅行先でとある外国人と話をした。そして、僕が福島に住んでいると知った彼が、この質問をしたのだった。彼は、原発事故があった当時の福島しか知らず、現在の復興しつつある状況を分かっていなかった。８年以上の長い時が経っても悲惨な福島のイメージがなくならないことに、大きなショックを受けた。福島に住んでいる多くの人々も、「長崎に原子爆弾が投下された」ということしか知らないのではないのだろうか。被爆者がどんな苦しみを感じたのか、どうやって長崎は復興したのかを分からないままだ。本当にそれでいいのだろうか。僕は長崎で起きたことを、特に戦争体験のない世代の人たちに伝えたいと思った。「伝えること」には、大きな意味がある。そんな想いで研修への参加を決心したのだった。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館

展示してある資料は、原爆による数多くの傷あとがあり、凄まじい迫力を感じた。熱線によって丸焦げになった人々の遺体の写真もあった。それを撮影した人たちも放射線の影響で、病気に苦しみ、この世を去っていったという。全ての人が口をそろえて原子爆弾投下後の世界を「地獄」という意味が、身に染みた。原形すらとどめていない家具や衣服、日用品の数々。そこに住んでいた人たちの何気ない幸せが一瞬で奪われたと思うと、怒りが沸き出てくる。けれども、今もなお世界で１万個以上の原子爆弾があるという事実を知ってしまえば、恐怖に変わってしまう。改めて人の命というのは、どれほどの意味を持つのか考えさせられた。

（２）青少年ピースフォーラム

被爆者の築城昭平さんの体験講話がとても印象に残った。彼は当時、夜勤に備えて睡眠中だった。次の瞬間、気づく間もなく吹き飛ばされ、全身火傷を負った。彼の皮膚は真っ赤にただれ、歩くことすらままならない状態だったという。道の両脇には、熱線で口の位置すら分からなくなった顔の人々が横たわっていた。僕は原子爆弾が人に与える被害の大きさに驚き、身を震わせた。「私は世界の人々にこの話がしたい。」この言葉に辛い過去を周りに伝え、平和に貢献したい、という彼の強い決意を感じた。全ての被爆者が当時のことを話せる訳ではない。辛く恐ろしい過去を話す勇気に、僕は感動した。改めて強い人だ、と気付かされた。そして、僕も戦争のない世界の実現のための力になりたいと思った。

また、全国各地から集まった小学生から大学生までの幅広い世代の方々と、平和に対する意見交換を行った。戦争の原因は、経済・宗教・領土の違いなど理由は様々だ。では、戦争をこの世界からなくすためにはどうすればよいのだろう。全ての共通点は、相手の立場に立って考えたり、人の話に耳を傾けたりして、話し合うということだ。つまり、国境を越えた交流をしてお互いを「理解」すること。そして、文化を「尊重」して良いところを認め合うこと。「平和の実現」それは堅苦しい会議から始まるのではなく、生活していく中でお互いの絆が深まれば、それは戦争を回避する大きな力になるに違いない。また、意見交換の中では思いつくことがな

＜ 被爆者の想い、この地に ＞

かった新しい発見もあり、自分を高めるきっかけになった。

3　心に残ったこと

僕にとって最も印象的だった場所は、上記の写真の建造物である。手前の黒色の柱は、長崎で原子爆弾が炸裂した真下の地点（爆心地）を表している。この上空 500m で、原子爆弾が炸裂した。僕が見学した日は青空だったので、あの時上空が真っ黒に染まったことが信じられなかった。がれきの山や立ち昇る煙、そして遠くまで歩き回る人々、その全てが悲しみに満ち溢れていたに違いない。平成 30 年 8 月現在、原爆死没者は 179,226 名にのぼる。「悲劇の空を二度と作ってはいけない」、そう心に誓った。

爆心地の後ろに見えているレンガ造りの塔は、長崎を代表するキリスト教の教会である「浦上天主堂」の一部だ。信者が約 30 年をかけて作り、東洋一と言われた。原子爆弾によってそのほとんどが破壊されたなかから移設を経て、こうやって今もなお 74 年間この土地に建ち続けている姿を見ると、変わることのない強さと威厳が感じられる。そして、何事にも頑張れるような気持ちになれる。平和を守ることが自分の使命だと、胸に刻んだ。

4　派遣研修に参加して感じたこと

平和祈念式典に参列し、ありのままの声を実際に聴いてきた。その中で長崎市長が述べた「長崎平和宣言」のある言葉に心が動かされた。

「原爆は『人の手』によって作られ、『人の上』に落とされました。だからこそ『人の意志』によって無くすことができます。」

この言葉は、僕の中にあった「核兵器がこの世界から全てなくなるはずがない」という迷いを根本から切り崩した。平和祈念式典や原爆資料館では、たくさんの人々が日本政府に核兵器廃絶を訴えていた。唯一の被爆国として長崎が、世界から注目されている。だからこそ、最初から諦めてはいけない。長崎市民が原爆投下という被害を受けてもなお、平和を訴え続ける姿を見ていると、僕自身も自然と勇気が湧いてきた。その一方で、長崎市民だけが平和を守る立場にあるわけではない。この世界に住む一人ひとりに役割が課せられていると思う。例え、生まれた地域や文化に違いがあったとしても、同じ目標を志せばどんな壁でも乗り越えられるはずだ。一つに団結することが、世界の国々でさえも動かす力になると気付かされた。

世界からすぐに核兵器を無くすのは難しいだろう。だからこそ長い時間と少しずつ進み続ける強い決意が、僕たちに試されると思う。人と人とが親から子へと「命のバトン」をつなぐように、戦争を知る世代から知らない世代へと「平和のバトン」をつないでいかなければならない。核兵器のない世界が実現する日を信じて、僕も平和への一歩を踏み出したいと思う。

あの日の記憶

郡山市立郡山第二中学校２年　本　間　　詠

1　派遣研修への参加に当たって

平和であることは、決して「当たり前」ではないこと。私がこの事実を知ったのは、小学生の頃、国語の授業で読んだ「大人になれなかった弟たちに…」という本からだった。そこに描かれていた戦争の悲惨さに衝撃を覚え、「もう二度と同じことが起こってはならない」と、強く感じたことを今でもはっきり記憶している。その日からずっと「平和の大切さを伝えていきたい」と考えていた私は、今回この事業に参加することに迷いはなかった。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館

言葉を失うとは、まさにこのようなことなのかと思った。目の前に見る原爆投下後の状況は、改めて原爆の恐ろしさに気づかせてくれた。1945 年８月９日、あの日、長崎に原子爆弾（通称ファットマン）が投下された。11 時２分、運命の時を刻んだまま針が止まってしまった時計や、皮膚がただれ、全身大やけどを負った人々の写真など、戦争を知らない私たちに、まるで直接語りかけてくるようだった。私はこの事実から目を背けてしまいそうになった。しかし、原爆投下によって一瞬にして奪われた多くの命、その命を奪ったファットマンに含まれたプルトニウムの大きさがソフトボールにも満たなかったという事実が、冷静な自分を呼び戻し、今もなお、核兵器保有国があることを深く考えさせた。そして、私に「平和の大切さを伝えていきたい」というあの日の決意を思い出させた。

（２）被爆者の方の声

築城昭平さんの目には、力強い魂が宿っていた。「青少年ピースフォーラム」の場において、被爆者の方の貴重な話を聴く機会をいただいた。現在、被爆者の方の平均年齢は約 82 歳である。私は平和を伝えるために、学べることは全て吸収しようと思った。被爆当時 18 歳だったという築城昭平さん。夜の工場での仕事のために仮眠をとっていたそうだ。そしてあの時、一瞬全てが光に包まれた後、辺りに生命の気配がなくなり、深い闇の世界にただ一人取り残された気分だったという。

やはり経験された方の話は、想像を絶するものだった。私はいつしか憤りを覚え始めていた。この例えようのない恐怖と憤りをたくさんの方に事実と共に伝えていきたい、そんなふうに強く考えさせられるとても貴重な時間となった。

（３）平和祈念式典

黙祷―。これが長崎の空気なのだ。74 年前のあの日。この場所の上空約 500 メートルの地点で、原子爆弾は炸裂した。それはキノコ雲を作り、大勢の命を奪い去っていった。式典に参加した人々は、みんな真剣だった。静寂な雰囲気の中、多くの方のあいさつを聞いた。一つひとつの言葉が胸に突き刺さり、自分に何が出来るだろうかと、何度も何度も問いかけていた。「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ」、被爆国が訴えてきたスローガンを実現すること、長崎を最後の被爆地にするために自分ができることを本気で考えていきたいと思った。

そんな中、毎日のように報道される世界各地での紛争やテロ行為、弾道ミサイル発射のニュースを聞くと、心が締めつけられる思いになる。まだまだ、世界平和への道のりは遠いものだと感じてしまう。「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ」が、世界の人々の心に届いてほしいという願いが強くなる。

＜あの日の子どもたち＞

3　心に残ったこと

「原爆殉難教え子と教師の像」。私はこの像から平和への強い祈りを感じた。立っている教師が、下の子どもたちにふりかかる暗雲を切り裂くという意味があるそうだ。そしてあの日、無残にも命を失われた、教師と生徒への追悼として建てられたものでもある。原爆資料館のすぐ近くにあることからも、そこに込められたメッセージを読み取られた。戦火の中を生き延びた人々にも、「原爆病」と呼ばれる後遺症が残った。その中には、幼い子どもや学生も含まれていた。自分と同じ年齢の生徒が、当時その状況を生きたと思うと胸が詰まった。水を求めて亡くなった人、全身大やけどを負い悶える人。そんな生き地獄を見てしまった学生たち。私が想像する以上の惨劇だったのだろう。写真の像には鳩がいる。鳩は平和の象徴だ。もう二度と悪夢が起きぬように。平和への祈りを私はひとつ心に刻むことができた。

4　派遣研修に参加して感じたこと

今回の研修に参加して知った事実は、今まで私が持っていたイメージを遥かに超えるものだった。このことは、「平和の大切さを伝えたい」という気持ちを確固たるものにした。そのためにも、もっともっと過去の歴史を深く学び、現在の世界情勢にも関心を高く持たなければならないと思った。

そして、今、私が住む郡山が、「核兵器廃絶都市」を宣言していることを誇りに感じた。市全体で「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ」を共有していこうという考えは、私の「伝えたい」という気持ちの背中を押してくれている。

普段の生活に戻った今、身近なところでも戦争の種はまかれてしまうと考えた。周囲の人たちに、小さな優しさを持つだけでも、変われると思った。この研修の機会をいただき、心から感謝している。今回の経験を無駄にしたくはない。「伝えたい」という想いを形にしていきたい。二度とあの日を繰り返さないために。

平和の大切さ

郡山市立郡山第三中学校２年　小　菅　泰　誠

1　派遣研修への参加に当たって

私は、1945 年８月９日に長崎へ「ファットマン」と呼ばれる原子爆弾が投下されたということは知っていたが、原子爆弾による長崎の被害についてはあまり知らなかった。先生から長崎派遣事業についての話があり、私は長崎の原子爆弾による被害を知り、平和について考える良い機会になると思い、参加を希望した。

派遣事業に参加するにあたって、事前に長崎の街や歴史について調べると、長崎に原子爆弾が落とされた理由が残酷であることが分かった。私は、実際に長崎に行って自分の目で確かめて、戦争の悲惨さを周りの人に伝えたいと思った。

2　派遣研修に参加して

私は、派遣研修で初めて長崎に訪れた。長崎は、緑豊かな山と青く澄み渡った海があり、とても明るい街だった。そのような素晴らしい国際都市が 74 年前に、原子爆弾によって一瞬のうちに焼け野原となってしまったとは思えなかった。

（１）長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原子爆弾の仕組みや原子爆弾による被害について知ることができる資料がたくさん展示されていた。爆風によって 11 時２分に止まった柱時計、脚の曲がった給水タンク、熱線によって溶けてくっついた６本の瓶…。原子爆弾の凄まじさや恐ろしさが伝わってきた。74 年前の人々の苦しみが聞こえてくるようだった。中でも僕が目を覆ったものは、全身が黒焦げになった少年の写真だった。

何の罪もない何万人もの尊い命が、たった一発の原子爆弾によって奪われてしまったことを知り、胸が痛くなった。

（２）平和公園

平和公園には、原爆犠牲者の慰霊と世界恒久平和を祈念して建造された平和祈念像と、原子爆弾でやけどを負い、水を求めて亡くなっていった被爆者の冥福を祈り造られた平和の泉があった。そして、私たちが訪れたときは、世界中から届けられた千羽鶴があった。

平和公園に行って、最初に目に入ったのは平和祈念像だ。平和祈念像の天を指した右手は「原爆の脅威」を、水平に伸ばした左手は「平和」を、軽く閉じた瞼は「原爆犠牲者の冥福を祈る」を、横にした右足は「原爆投下直後の長崎市の静けさ」を、立てた左足は「救った命」を表現している。

たくさんの人の平和への想いを感じ、平和な世界になってほしいと改めて思った。

（３）青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは平和会館で２日間行われ、全国の平和使節団と一緒に、被爆の実態や平和の尊さを学習した。

１日目は、被爆者体験講話があった。被爆者の築城昭平さんは、被爆当時、長崎師範学校に在学中の 18 歳だった。築城さんは、軍需高校へ学徒動員され、爆心地から 1.8km はなれた学校の寮で、当日の夜勤に備えた睡眠中に被爆した。全身やけどを負い、特に左腕と左足が重傷だったそうだ。原子爆弾で亡くなってしまった人だけでなく、生き残った被爆者の方々のその後の人生を変えてしまうことも原子爆弾の恐ろしいところだと思った。

２日目の午前中は、中継会場の原爆資料館ホールで平和祈念式典の様子を見た。開式の前に、被爆者合唱が行われた。「もう二度と」という合唱曲の中に「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞があった。私は、

＜平和の泉＞

その歌詞がとても印象に残った。被爆者の方々の今までの辛さや平和を願う想いが伝わり、目頭が熱くなった。そして、11時2分、被爆者の方々に黙祷を捧げた。

3　心に残ったこと

この写真は、平和公園にある平和の泉である。私が特に印象に残ったのは、平和の泉の前に立てられた石碑だ。石碑には、ある少女の手記が刻まれていた。

「のどが乾いてたまりませんでした
　水にはあぶらのようなものが
　　一面に浮いていました
　どうしても水が欲しくて
　　とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

この手記から、「水を飲みたくても飲むことができず、飲めたとしてもあぶらの浮いた水を飲むことしかできなかった」ということが想像できる。被爆者の方々は原子爆弾で体内まで焼けただれ「水を、水を」とうめき叫びながら亡くなっていったそうだ。そういった地獄のような状況で亡くなってしまった被爆者の方々の苦しみがこの石碑から伝わり、私は胸が張り裂けそうになった。

平和であることが当たり前のように生活しているが、当たり前ではない。だからこそ平和であることに感謝したい。そして、いつまでも、いつまでも、平和な世界が続いてほしいと思った。

4　派遣研修に参加して感じたこと

今回、4日間の派遣研修に参加して戦争の被害や核兵器の恐ろしさを詳しく知ることができた。そして、戦争は二度と起こしてはいけない、核兵器は世界には必要ないと強く思った。

被爆者の方々の平均年齢は、80歳を超えている。そして、これから少なくなっていってしまう。だからこそ、今回、被爆者の方のお話を直接聞くことができたことは、特に貴重な体験だったと思う。

今も、世界では戦争や紛争が続いている。一緒に生活している大切な家族や友達がいなくなってしまったら、どれだけ辛いだろうか。だから、このようなことが二度と起きないように、戦争の悲惨さと平和の大切さを後世に伝え続けなければならない。

平和への道

郡山市立郡山第四中学校２年　鈴　木　紀　子

1　派遣研修への参加に当たって

私は、小学校の時に授業でいろいろな戦争について学んだ。小学校の教科書の燃え上がる炎から防空頭巾を被った私と同じくらいの少女が必死に逃げている様子の絵が目に留まった。それを見た時、胸が苦しくなった。それがトラウマになり、戦争について、学ぶことが怖くなってしまった。テレビで戦争の歴史について流れていると、すぐ背を向けてきた。だから、今回の長崎派遣事業に行こうとは思わなかった。しかし、ずっと背を向けていたら私は変われないと思った。

勇気を出して自分を変えること。戦争という事実に正面から向き合って、自分の言葉で人に伝えられるようになること。この二つのために私はこの派遣研修に参加すると決意した。

2　派遣研修に参加して

（１）平和祈念式典

この日は長崎が祈りに包まれる日である。

昭和 20 年８月９日午前 11 時２分、長崎に原子爆弾が投下された。そして、家族、想い出、命など大切なものがなくなってしまった。

毎年、平和公園で行われる長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、献水や献花、平和宣言などが行われる。午前 11 時２分になると、長崎の鐘と共に１分間の黙とうが捧げられる。その中でも、被爆者の方の合唱や平和への誓いは、とても心を打たれた。平和への強い願いと今までの苦しみが詰まった声、言葉には私たちでは伝えられない深い意味が込められているように感じた。

今回私は平和公園の会場に参列できなかったが、別会場の原爆資料館ホールで参列した。式典が始まる前には長崎の高校のハンドベル演奏、盲目の方の弾き語り、被爆者の方の書いた本や詩の朗読があった。どの方も平和を大切にしていることがよく分かった。

（２）青少年ピースフォーラム

８月８日と９日の２日間にわたり、平和会館で青少年ピースフォーラムに参加した。被爆者体験講話や平和学習などを行った。

１日目は、原爆の恐ろしさについて学んだ。原爆の中には三つの凶器が隠れている。爆風、熱線、放射線だ。特に熱線は、とても熱く、火傷を負う人がたくさんいた。そのため、「水をください」と求める人が大勢いたが、水をあげると亡くなってしまうと言われていたため、あげることができなかったそうだ。そのことを今でも後悔している人がいる。このように、生命あるものを一瞬のうちにして奪った核兵器を絶対に許してはいけない。そして、もう二度と核兵器を作ってはいけないと世界中の人が感じることが必要だと思う。被爆体験をした築城昭平さんも「核兵器のない本当の平和を作ってほしい」とおっしゃっていた。

２日目は、戦争の原因や解決策について全国の方と意見を交流した。意見を出し合ってみると、本当に些細なことから戦争が始まっているように思えた。それを解決するには、やはり兵器を作らないことや相手を尊重し合うことだった。当たり前なことだけどよく考えてみると、とても難しいことだと改めて気づいた。

＜山王神社の一本柱＞

3　心に残ったこと

上の写真は、山王神社の一本柱である。

爆風の影響で鳥居の半分が壊れてしまった。この写真は被爆した当時のもので、周りがすべて荒地になっているところに真っ直ぐ立っている。あまりの衝撃に立ち尽くしている人のようだ。今でもこの鳥居は残っている。一時期は倒れてしまうのではないかと心配され、取り壊そうという議論になったという。しかし、調査の結果、多少の揺れには耐えられる強度があると分かったため、大切に残されているのだ。たった1本の柱だけなのに、しっかりと地に足が着いている。この姿が強く逞しく前を向いている人のようにも見えてきた。もしかしたら、長崎市民の方の勇気のシンボルになっているかもしれない。

長崎は74年経った今、にぎやかで楽しい町に変わり、昔の原爆被害の面影はないように見える。しかし、よく見ると一本柱のようにいろいろな場所に原爆の爪痕が残っていた。それはきっと、未来にも伝えていくためだろう。原爆の悲惨さを忘れられないように。そんな平和への想いで溢れているこの町に、胸を打たれた。

4　派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣研修を通して、戦争の悲惨さや核兵器の脅威を改めて実感した。そして、平和について考えるきっかけにもなった。

今まではただ何となく生活して、平和の二文字は全然頭になかった。しかし、平和を得るまでには、いろんな人が苦労していることを知った。協力し合ったり、助け合ったりして築き上げたものが、こうして今、実になっていると思うと、感謝しかなかった。

ずっと戦争というものに向き合うことが怖くて逃げてしまっていた。しかし、いざ向き合ってみると、たくさんの危機を感じた。

原爆の記憶の風化や被爆者の減少により、平和の尊さが失われつつある。この状況を救えるのは、見て聴いて感じてきた自分自身だと思う。「私たち一人ひとりの力は微力であっても、決して無力ではないのです。」これは、平和祈念式典で聴いた長崎平和宣言の中の長崎市長の言葉だ。

以前までは、私が動いても何も変わらないと思っていたが、この一言でいてもたってもいられなくなった。だから、二度と同じ失敗を繰り返さないために、少しずつでいいから今回学んだことを伝えていきたい。微力を積み重ねて、大きな力に変えるために。

百聞は一見にしかず

郡山市立郡山第五中学校２年　相　樂　堯　哉

1　派遣研修への参加に当たって

長崎派遣事業に参加する前から、僕は原爆をとても恐ろしい兵器だと思っていた。しかし、それは知識としての漠然とした恐怖だった。よく授業などで核兵器についての話題が出るし、原爆に関する本を読んだことがあったが、理解できなかった部分が多かったと思う。なぜなら、原爆の被害がどれほどのものなのか想像しても、本やテレビの話から想像するのには限界があるからだ。

この長崎派遣事業に参加できることになり、もう一度原爆について自分なりに振り返ってみた。大切なことは、核兵器はもう二度と使われてはいけないという事、そして平和より大切なものはないという事だ。心の底からそう感じた。

長崎派遣事業は、もう本やテレビではない。僕は長崎を歩き、建物に行き、資料を間近に見ることができる。今まで本の中の歴史だったものが、目の前に現れるのだ。原爆について見聞を深めるこれ以上の機会はないので、僕はたくさんの期待と緊張で長崎派遣事業に参加した。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館にて

２日目に僕たちは原爆資料館を訪れた。そこに展示されていた物はどれも目を背けたくなるような辛く重い事実だった。

展示室の一番初めに置かれていた物は柱時計だった。爆心地より約 800 メートル離れた民家にあったもので、時計の針は爆風によって 11 時２分で止まっていた。時計は、その当時の現場に引き込まれるような感覚になる。僕は、東日本大震災の時の時計を思い出した。仙台の科学館に展示されていた時計は、地震があった２時 46 分のまま止まっていた。当時に戻ったような感覚を覚えている。

展示品からは、爆風の被害が遠く離れたところまでも及ぶ事を学んだ。また爆風の温度によって瓶が溶けて変形していたり、瓦が泡立っていたりした。実際に触れることができ、怖さを感じた。

長崎に落とされた原子爆弾の模型を見ることもできた。爆弾の名前は通称ファットマン（太った男）で見た目はほとんど黄色だったが、接合部分が赤と黒に変色していて不気味だった。

（２）長崎の名所・名物

長崎の名所と言えばグラバー邸や島原城、そして日本三大中華街と称される長崎新地中華街がある。一日目のお昼ご飯はそこで食べた。とても豪華で、長崎名物のちゃんぽんから角煮まんじゅうまで、様々な美味しいお料理が振る舞われた。また、お店を出るととても豪華な装飾が施された物がおかれていた。福島県内では見たことがなかったため、その美しさに驚いた。

次に向かったのは中通りだ。そこには、長い道の側に多くの数の店が連なる光景が広がっていて、数十メートルごとに名前が違っていた。長崎では昔そこでどのような産業が盛んだったかで名前が違う。紺屋町なら染め織物、麹屋町なら麹の製作が盛んだった町ということだ。

長崎は香港・モナコと並び新三大夜景とされ、100 万ドルの夜景ともいわれている。目の当たりにした時に、息をのむほどきれいだった。

＜平和の泉＞

3　心に残ったこと

僕が心に残った研修は青少年ピースフォーラムだ。他の地域から来た人たちと様々な活動を通して意見交換をすることができた。自分以外の新しい考えを知ることができ、とても貴重な体験となった。

その活動の中で、世界にある核兵器の数を表現した音が印象的で恐ろしかった。ビー玉のようなものを落として音を出したのだが、長崎に落とされた原子爆弾が 1 発なのに対して、世界にある原子爆弾の数は約 1 万 3,000 発以上。会場に鳴り響いた音は世界にはいまだ平和の安心がない事を教えてくれた。

その後なぜ戦争が起きるかについてたくさんの人と話し合った。「経済的な理由」と話した人もいれば「昔の出来事のせい」と話した人もいた。平和な世界の実現には様々な活動が必要だ。

被爆者の方が、「こうして被爆者の人と直接話す機会なんてなかなかないよ。」と話した。現在、被爆者の高齢化が進んでいるのが日本の現状。彼ら被爆者の方々がいなくなってしまっては、もう核兵器の恐ろしさを伝える人がいなくなってしまう。だからこそ、僕たちは戦争の歴史を知り、正しい知識を身につけ、次の世代に伝える役割がある。そして、核兵器根絶を願い続けることが大切だと学んだ。

4　派遣研修に参加して感じたこと

派遣研修の 4 日間、新しい友達と一緒に様々な活動をすることができた。長崎派遣に行く前、他校の中学生はただ活動を共にするだけだと思っていた。しかし、寝食を共にすることによってすぐに親しくなり、様々な意見を交換し合い、想いを共有することができた。そして長崎原爆資料館からピースフォーラムまでの活動を通して、この何気ない日常こそが実は平和で幸せなことなのだという事に気が付いた。

今回の派遣に参加したのは、自分の見聞を広めるだけではなく、学校の友達や先生、家族にも学んだことを伝えたかったからだ。被爆者の方の話を聞く事が出来たのは本当に良い体験だった。今回の派遣を共にした仲間と同じように、学んだこと、感じたこと、考えたことを周りに伝えたい。

平和とは何だろうか。世界には、長く紛争が続いている地域もあれば、新たな紛争が始まった地域もあり、悲しみや復讐が絶えない。現在の日本は戦時中に比べれば平和で安全だが、ぎりぎりのバランスで成り立っている平和だと思う。

日本はアメリカ合衆国の「核の傘」に守られている。だが、核の傘はとても危険だ。日本は「非核の傘」という平和の傘を世界に広める役割があることを僕は忘れない。

人から人へ

郡山市立郡山第六中学校２年　大河原　舞　音

1　派遣研修への参加に当たって

1945年８月６日、９日と広島・長崎に原爆が落とされた。このことは授業や毎年テレビで放送されている平和祈念式典を見て知っていた。原爆は、たった１発でたくさんの方々の命を奪ってしまうとても恐ろしいもの。しかし、原爆投下から74年経った今、核兵器がなくなるどころか進化している。このまま核兵器の開発が続いたら、また同じ苦しい出来事を繰り返すことになるだろう。私はそのような世の中になることに反対である。

戦争を知らない私たちにまず必要なことは、戦争や核兵器の怖さを知ることだと私は思っている。そこで被爆地長崎で、自分で見て、聴くことを通して戦争や核兵器の恐ろしさを知りたいと思い、今回の「長崎派遣事業」の参加を希望した。

2　派遣研修に参加して

（１）永井隆記念館・如己堂

永井博士は、放射線医師となったが放射線被曝により、白血病となり、余命３年と告げられた。その年の８月９日に原子爆弾が落とされ博士は長崎医科大学医院で被爆しさらに、最愛の妻を亡くす。そんな中、被爆した患者さんたちの治療に励んだのだ。余命３年と告げられ、家族を亡くした時に人のために動けるだろうか。私には出来ないだろう。

展示の中に「原子爆弾は長崎でおしまい！長崎がピリオド！平和は長崎から！」という、メッセージがあった。これは、博士は病状が悪化し、寝たきりになりながらも17冊の本を書き残した中のメッセージの中の一つだ。私は、これらから、平和の大切さを訴えていると感じた。命を懸けて残してくれたメッセージを私たちは忘れてはいけないと感じた。次は、私たちが発信していきたい。

（２）平和公園・平和祈念式典

平和公園には長崎の鐘や平和の泉、平和祈念像など文字ではなく形で平和への願いを表しているものがたくさんあった。

平和祈念式典では山脇佳朗さんの平和への宣言が印象深かった。「60歳を過ぎて英語を独学で学び、2015年11月長崎で開催されたパグウォッシュ会議では世界の科学者に英語で『核兵器廃絶』に力を貸して下さいと訴えました。」というスピーチから、こんなにも「核兵器廃絶」を訴えているのに、ロシアとアメリカの間に締結している中距離核戦力全廃条約の破棄などの「核兵器廃絶」を願う人々の期待を裏切る行為をするのか不思議でしかたなかった。

今、被爆者の平均年齢は82歳を超えていて、被爆者は日を追うごとに亡くなっているのです。この平和宣言をこれからは私たちが伝えていく番だと感じた。

（３）青少年ピースフォーラム

１日目は被爆者の築城昭平さんの被爆体験講話を聴くことができた。直接聴けるとても貴重な体験をすることができた。

２日目は、全国から集まった約500人の仲間と「戦争の原因とみんなにできる解決策」について話し合った。私たちの班では、争いの原因としては、考えや文化の違い、自己中などの意見が出た。そして、相手の理解が得られないまま、強引に結ばれた「不釣り合いな条約」が戦争の原因となることにまとまった。その解決策として、話し合い、他国のことも考えるという意見がでて、「相手のことも考えて決めごと

＜原子爆弾 ファットマン＞

をする」にまとまった。お互いに自国ファーストで条約を決めることで争いに繋がると考えたからだ。相手のことを考えることは戦争がなくなる一番の近道なのではないかと考えた。

3　心に残ったこと

原爆資料館には、11 時２分を指してとまっている柱時計や目を背けたくなる数々の写真、溶けた６本の瓶など、原子爆弾の恐ろしさを物語るものが並んでいた。私はとても怖くなった。

その中でも一番印象に残ったのは、この写真の長崎に投下された原子爆弾の実物大の模型だ。ファットマン自体は大きいが、核はソフトボールくらいの大きさだった。この小さな核が一瞬にして長崎の町を襲い、何万人という尊い命を奪った。生き残った人々も放射線によって白血病やがんになり、苦しみながら生きていると考えるととても恐ろしいものだと感じる。さらに、このような恐ろしいものをつくりだしたのが、私たちと同じ人間だと思うと落胆する。

世界では、長崎に投下されたファットマンを越える威力の原子爆弾が約 15,000 発も存在している。この原子爆弾が投下されたら世界はどうなってしまうのだろう。自国を守るためだけに原子爆弾を使っていいのか。このように考えていくと、地球には１発も原子爆弾を残してはいけないと思う。だから、核兵器廃絶を訴えることはとても大切なことだと改めて思った。

4　派遣研修に参加して感じたこと

４日間の研修を通して、核兵器廃絶の必要性、命の尊さを学んだ。長崎は世界新三大夜景に選ばれる美しい街だ。74 年前に焼け野原だったことを忘れる程だった。ここまで美しい街になれたのも、人々が同じ意志を持って平和を願っていたからだと感じた。そして、今当たり前のように過ごしている日々があるのは、先人たちの努力のおかげだと思い、感謝の気持ちを持つことが出来た。

私は研修に参加する前までは、授業やテレビで原爆投下のことを全て知っていたつもりだったが、研修を終えて知識が不十分だったことに気が付いた。被爆者の話や当時の痕跡を直接触れる貴重な体験が出来たことによって、感じ取れたことがたくさんある。被爆者は日に日に減っているのが現状だ。被爆者の思いを受け継いで、次に伝えていくのは若い世代の私たちの使命だと思う。さらに、唯一の被爆国である日本だからこそ分かる原爆の怖さを世界に発信していき、つらい思いを二度と経験しないために、核兵器廃絶を訴え続けたい。

そして、このような貴重な機会をいただけたことに感謝したい。

二度と繰り返さないために

郡山市立郡山第七中学校２年　大　竹　宏　武

1　派遣研修への参加に当たって

今、日本は戦後 74 年が経ち、戦争を知らない人が多くなっており、それに伴い、核兵器の本当の悲惨さや恐怖を知らない人も多くなっているのが現状となっている。私には祖母がおり、祖母から戦争について小さいころからずっと話を聞いており、当時がどのようだったか、空襲とはどんなものだったのか、などの話を事あるごとに耳にしていた。その影響か、今回の長崎派遣事業は、原爆が落とされた長崎市に行くことができ、その時の様子を目や耳など、体の感覚全てで感じ取れる千載一遇のチャンスだと思った。さらに、長崎に行き、見聞した事を私たち戦後生まれの世代の人たちに「自分の言葉で」核兵器の恐ろしさを伝えられる、ということに魅力を感じ、今回の派遣事業に学校代表として出ることにした。

2　派遣研修に参加して

（1）原爆資料館

原爆資料館には、原爆によって出た被害がどのようなものか、写真や図などで詳しく説明されていた。11 時２分で止まった時計、ファットマンの模型、曲がってしまった給水タンク、溶けてくっついてしまった６本の瓶など様々なものが展示されていた。その中で最も印象に残ったのは「浦上駅ホームの母子の遺体」という写真だ。そこには、熱線を受けたのかひどい熱傷の跡が全身に見られる、人なのか分からないほど真っ黒になった、目を背けたくなるほど悲惨な母子の写真があった。将来が希望に満ち溢れていたはずのたくさんの尊い命が１発の爆弾で奪われた、という事実に怒りと悲しみの色を隠せずにいた。

（2）平和公園

爆心地近くには平和を願うために作られた公園がある。普通の遊具がある公園ではない。そこには、原子爆弾落下中心地碑や平和の泉などがあり、毎年８月９日に行われる「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」の会場になる場所でもある。平日にもかかわらず、たくさんの人が平和公園を訪れていた。その光景を見た僕は、「たくさんの人が平和を願っているのだな」と感動した。

（3）平和祈念式典

８月９日。それは長崎に原子爆弾が投下された日。今年の式典はテレビからではなく、現地の、しかも式典会場の平和公園に行き参列した。会場にはたくさんの参列者、遺族の方々がいた。最初は被爆者の合唱「もう二度と」。これ以上私たちのような被爆者を作らないで、という強い想いが歌声の中に込められていた。式典が進むに従い、運命の時間が迫ってくる。

午前 11 時２分。公園内にある長崎の鐘が鳴り響くと同時に黙とうをささげた。「世界から一つ残らず核兵器がなくなるように」と。その後は長崎市長の長崎平和宣言、被爆者代表の平和への願い、安倍総理大臣をはじめとする来賓の挨拶と進み、合唱「千羽鶴」をもって式典は終了した。

＜平和祈念像＞

3　心に残ったこと

上の写真は、平和公園内にある平和祈念像である。この像は、長崎市民の平和への願いを象徴する像であり、天を指している右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を意味している。実際のものを見るのはこれが初めてであったため、見た時の迫力には驚いた。その表情からやさしさも感じられるほどであった。僕は、「この祈念像は原爆により亡くなった人たちの冥福、そして原爆がこの世界からなくなって平和な世の中になることを祈る偉大な像であり、長崎市全体の平和を見守る像でもある。」と思った。完成から 60 年以上たった今でも、平和を願うために祈り続けている。しかし、被爆者の年齢は高くなってきており、戦争を知らない人も増えてきているのが現状だ。そんな人たちにも平和の大切さ、戦争の恐ろしさを訴えかけている。もう二度と大きな過ちを犯さないように、平和が永遠に続くように。

4　派遣研修に参加して感じたこと

この研修を通して長崎の文化、長崎の歴史、原爆の悲惨さ、そして平和の大切さ。色々なことを学ぶことができた。原爆はどのようなもので、どのような被害をもたらしたか、平和とはなんなのか、実現するにはどのようなことが必要か、など色々なことを学ぶことができた。人が作ったものが、人に対して悲劇をもたらす。それならば人の意志によって悲劇を繰り返さないことができる。戦争は何の得にもならない。生まれるのは悲劇と損失だけ。平和というものは世界中の人が集まり、協力し、実現しようとすることで初めて作り上げられるものだと思う。今、世界では様々なところで紛争が絶えず続いている状態にある。巻き込まれて親を失った子どももいる。食べ物がなく、飢えに苦しんでいる人がいる。そんな人たちがいる事実があるのに、無実の人たちも巻き込んで戦争をするのはおかしいと思う。自分の意見を無理やり押し付けたりせずに、話し合いによって物事を決めていけば、戦争という過ちを繰り返すことはないと思う。ただ、人は忘れやすい動物であるが知能を持っているため、考えながら行動できる。その利点を大きく活用してゆけば、平和の完成まで大きく近づくと思う。今回僕が学んだことが役に立って、市民の皆さんに伝わるように。

もう二度と過ちを繰り返さないために。

平和への「語り手」として

郡山市立緑ケ丘中学校２年　面　川　苺　花

1　派遣研修への参加に当たって

広島・長崎への原爆投下から 74 年。一瞬にして、建物は壊れ、人は吹き飛び、草木は焦土と化した。

現代の日本は平和だと考える人も多いだろう。しかし、世界に目を向けてみると、今もなお資源や権力をめぐった争いが絶えないのだ。争いによって、住む場所や職を失くし、貧しく飢え、苦しむ人、そして、命までも失ってしまう人もいる。なぜ、何の罪もない人が苦しまなければならないのかと心が痛くなる。

私が住む福島県でも、東日本大震災で併発した原発事故による放射能の影響で多くの人が苦しんでいる。長崎の原爆投下と同じように決して忘れてはいけないことだ。だからこそ、私たちが「語り手」として世界の人々に真実を語り継ぐために何ができるのか、このような悲劇を繰り返さない社会にするためには何ができるのかを学びたいと思い、研修に参加した。

2　派遣研修に参加して

（1）原爆資料館

原爆資料館には、長崎型原爆「ファットマン」や黒こげになった弁当箱など、たくさんの原爆に関する資料が展示されていた。目を背けたくなるような資料も多く見られたが、その中でも特に印象的だったのが、「11 時２分」を指して止まった柱時計だ。この柱時計は爆心地から約 800m の民家から見つかった。爆風で損傷し、時計の針は爆発の 11 時２分を示している。私はこの時計を見て、原発の犠牲になった方々が、止まった時計の中にいると思うと、胸がしめつけられるようだった。

（2）青少年ピースフォーラム

ピースフォーラムでは、北海道から沖縄に至る全国各地の中学生や高校生と意見交換を行った。戦争を知らない世代での意見交換となったが、同じ意見は全く出なかった。しかし、全員が核兵器や戦争がない平和な時代になってほしいという強い想いをもっていた。

被爆した 92 歳の男性の体験談を聞かせていただいた。18 歳のときに被爆したその方は、軍需工場へ学徒動員され、爆心地から 1.8km の学生寮で夜勤に備えた睡眠中に被爆した。布団を頭からかぶっていたため、ガラスの破片や熱線から身を守れたそうだ。だが、全身に火傷を負ってしまい、特に左腕や左足は重傷であった。

被爆者の方は、過去のつらい経験を思い出すのもつらくて、苦しくて、それを私たちに語るのもとても勇気のいることだと思う。それでも、私たちに語ってくださるのは未来の人たちを守りたい、平和な時代を生きてほしい、そして、もう原爆で人を傷つけてほしくない。被爆者の方はそう思っているからだ。私は語ってくださる方々の大切さや、立場の大変さに気づかされた。

この先の未来と平和は、私たちが作り上げていかなければならない。被爆された方々のため、そして、私たちの未来のためにも二度と戦争を起こさないことが私たちの使命であると考える。そのためにも、長崎派遣で学んだことを、戦争を経験していない平和の時代しか知らない世代に、私たちが「語り手」として伝えていきたい。

＜平和の泉＞

3　心に残ったこと

８月８日木曜日、快晴。青空の下、光に包み込まれ、輝く泉に私の心はひきこまれた。

この写真は、平和公園にある平和の泉だ。しかし、ここには、この美しさとは裏腹な暗いエピソードがあったのだ。原爆のため、体内まで焼けただれた被爆者たちは「水を、水を」とうめき叫びながら、亡くなった。その痛ましい霊に水を捧げて、冥福を祈り、世界の平和と核兵器廃絶の願いを込めて平和の泉は作られたのだ。刻々と変形する噴水の水形は平和の象徴である鳩のはばたきを形作り、鶴の港といわれる長崎港の鶴を象徴している。

ここで、特に印象に残ったのは、泉のそばに立てられている石碑の中のある少女の手記だ。この手記から、少女があぶらの浮いた水を飲んでしまうほど、追いつめられていたこと、少女のように水を求めて多くの人が亡くなっていた残酷な光景が思い起こされる。

今ではきれいな水が当たり前のように飲めているが、当時はそれが当たり前でなかったこと、飲みたくてもがまんしたり、汚れた水を飲んだりするしかなかったこと、どれだけ私たちが恵まれているかが分かった。この石碑を見て、もしも自分がこの時代に生まれていたら…耐えることはできただろうか。改めて、このような悲劇を二度と繰り返してはいけないと思った。

4　派遣研修に参加して感じたこと

私たちは戦争のない時代に生まれた。戦争を体験したことがない分、戦争の恐ろしさをよく分かっていないのかもしれない。しかし、戦争があってはならないということは十分理解しているつもりだ。いつの時代にも争いはあり、平和を主張する国家が増えてきたとはいえ、完全になくなったとはいえない。誰もが苦しまず、笑っていられるような本当の平和な世界を私たちの世代で実現させたい。一人の力では不可能だが、世界中の人々が手を取り合って、助け合い、一つの輪のようになれば、本当の平和な世界を実現させることは可能だ。それは、とても困難なことかもしれない。しかし、今から一歩ずつ確実に前進していけば、きっと近い未来に実現できるはずだ。戦争地帯の人々の顔から苦しみが消え、笑顔が戻る、そんな日がいつか来ることを信じたい。

そして、私自身が長崎派遣を通して、学んできたことをまずは周囲の人々に伝えていくことが大切だと思う。現在、被爆者の平均年齢が82歳を超え、原爆の恐ろしさを経験したことのない年齢層がほとんどを占める。だからこそ、私が「語り手」として、被爆経験者の「生の声」や東日本大震災を経験した者としての「声」そして、原爆の悲惨さを語り継ぎ、平和な世界の実現に向けて貢献していきたい。

平和への想い

郡山市立富田中学校２年　丸　野　和　士

1　派遣研修への参加に当たって

私は、長崎派遣事業への参加者を２年生から募集すると聞いて、戦争をより深く学ぶ貴重な機会だと思い、ぜひ参加したいと思った。「長崎」と聞いて一番に頭に思い浮かぶのは、「原子爆弾」だ。小学校の社会の授業で広島と長崎に原子爆弾が落とされた事を知った。しかし、自分自身の経験に実際の戦争体験がなく、悲惨な事実が間接的な情報、あいまいな記憶としてあるだけである。長崎での派遣研修で実際にその悲惨な事実を学び、友達やまわりの人たちに原子爆弾の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、そして平和な世界の大切さを伝えたいと思い参加した。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館

ここは、原子爆弾に関する資料が多く展示されている場所である。私が一番衝撃的であった資料は「皮下出血斑が多発した少女」の写真である。この病気は、血小板数の減少および機能低下、毛細血管の異常によって起こる。たった一発の原子爆弾の投下で、顔をこんなに変形させてしまう事にとてもぞっとした。また、原子爆弾がとても恐ろしいと思わせた資料が二つある。一つは、「爆心地から 200m 以内の被爆瓦」である。熱線の直射を受けた瓦の表面はすべて沸騰して泡立ち、被爆瓦特有の発泡状の痕跡が見られる。近い距離であるほど泡は大きく、想像を絶する熱線の凄まじさを示している。爆心地での甚大な被害を思うだけで心が苦しくなる。

もう一つは、「ファットマン」の実像大模型だ。想像とは違い、それはあまり大きくない。その中にある、プルトニウムという物質は、ソフトボールぐらいの大きさしかなかった。こんな小さな原子爆弾の投下で約７万４千人の尊い命が奪われてしまった。どれだけ威力があったのかが分かる。現在、このような核兵器は世界中で合計約１万５千発近くもある。このままでは、将来ずっと核兵器のなくならない世界となってしまう。この状況を僕たちが変えていかなければならないと強く思わされる模型であった。

（２）青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、８月８日と、８月９日の２日間、全国の小・中学生と共に平和について学習した。この中で、被爆した築城（ついき）昭平（しょうへい）さんの講話があった。「世界中のみんなが核兵器のことを知ることで、核兵器のない平和な世の中が作れると思う。そして、人権を尊重することが平和につながる。」という言葉が一番心に残った。辛い思いをされた築城さんがしてくださる講話には、「私たちに核兵器の恐ろしさを後世に伝えていってほしい」という願いが込められていると強く思った。だからこそ築城さんの講話を無駄にしないよう、このことを伝えていきたい。

グループワークの中では、戦争の原因とその解決策についていろいろと話し合った。多くの意見が出されたが結論として、「意見の食い違いが戦争の原因。解決策は兵器の製造を止めること」と意見をまとめた。最後に班ごとにまとめた意見を１枚の大きな絵にした。班ごとにまとめているときは、何を書いているのか漠然としていたが、一つにまとめると、折り鶴や平和祈念像が書かれた大きな絵がみんなの想いとして完成した。この絵から僕は、一人ではできなくても同じ想いを持った多くの人が集まれば、大きなことを達成することができると思った。

＜平和の泉＞

3　心に残ったこと

上の写真は、平和公園にある平和の泉の写真である。原爆で体が焼けただれ、水を求めながら亡くなった被爆者の霊に水を捧げて冥福を祈るとともに、世界の平和が永久に続くことを祈念し建設された。手前にある石碑にはこう刻まれている。

のどが乾いてたまりませんでした
　　水にはあぶらのようなものが
　　一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
　とうとうあぶらの浮いたまま飲みました
　　—あの日のある少女の手記から

これは９歳の女の子の手記である。体が焼けるくらい熱くて、水が欲しくてたまらなかった苦しみが伝わってくる。それは想像を絶する苦しみであったと感じた。

私がこの４日間の派遣研修を通して、一番印象に残った場所は、「平和公園」である。この公園は、原爆落下中心地公園の北側にあり、悲惨な戦争をもう二度と繰り返さないという誓いと、平和への願いを込めて造られた。この平和公園の中で特に印象に残ったのが平和祈念像である。この特徴的なポーズには深い意味がある。天を指した右手は原爆の脅威を、水平に伸びた左手は世界平和を、横にした脚は原爆落下直後の長崎の静けさを、立てた脚は救われた命を、優しく閉じた瞼は戦争と原爆犠牲者の冥福を祈る姿を、それぞれが表していた。この像から私は、体験者からの平和への強い想いを感じることができた。

4　派遣研修に参加して感じたこと

私は、長崎派遣に参加したことで、平和の大切さや命の尊さ、核兵器廃絶の必要性などたくさんのことを学んだ。現在、被爆者の平均年齢は82歳を超え、原爆の悲惨さについて身をもって伝える人が減ってきており、今回被爆者である築城昭平さんの話を聴くことができたのはとてもよかった。辛い体験を話してくださった被爆者の想いを受け継ぎ、核兵器廃絶と世界恒久平和の確立をともに訴えていかなければならない。

最後に、この長崎派遣の機会をいただいた事に感謝したい。そして、郡山市長崎派遣団員としての自覚を持ち、今回学んだことを友達やまわりの人たちに伝えていきたい。

平和の大切さ

郡山市立大槻中学校２年　西　澤　琥　珀

1　派遣研修への参加に当たって

８月６日と９日に、広島と長崎に原子爆弾が投下されたことは、授業で習った。だが、これといった原爆の規模や被害はよく理解していなかった。そこで、長崎に行って実際に被爆者の話を聴いたり、原爆の資料を見たりして、もっと知識を得たいと思い研修に参加した。

そして何より、原爆の恐ろしさや戦争の無残さを次の世代の人々に伝えていくことが、自分たちの使命であると考えた。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館

入口のすぐ横に、たくさんの千羽鶴が飾ってあったのが印象的だった。当時爆風によって吹き飛ばされたステンドグラスの破片や、高温で変形したビール瓶等があり、中でも 11 時２分を指して止まっている柱時計は、当時の様子を鮮明に表しており、怖いと思った。長崎に落ちた原子爆弾「ファットマン」の模型は、黄色に黒のラインが入っている、不気味なデザインだった。原子爆弾が爆裂し、高温に肌を焼かれた少女の写真を見て、あまりの無残さに胸が痛くなった。原爆がもたらす被害は、自分が想像するよりずっと重く、大きかった。もし、郡山に原爆が落とされたらと考えると、背筋が凍った。

（２）青少年ピースフォーラム

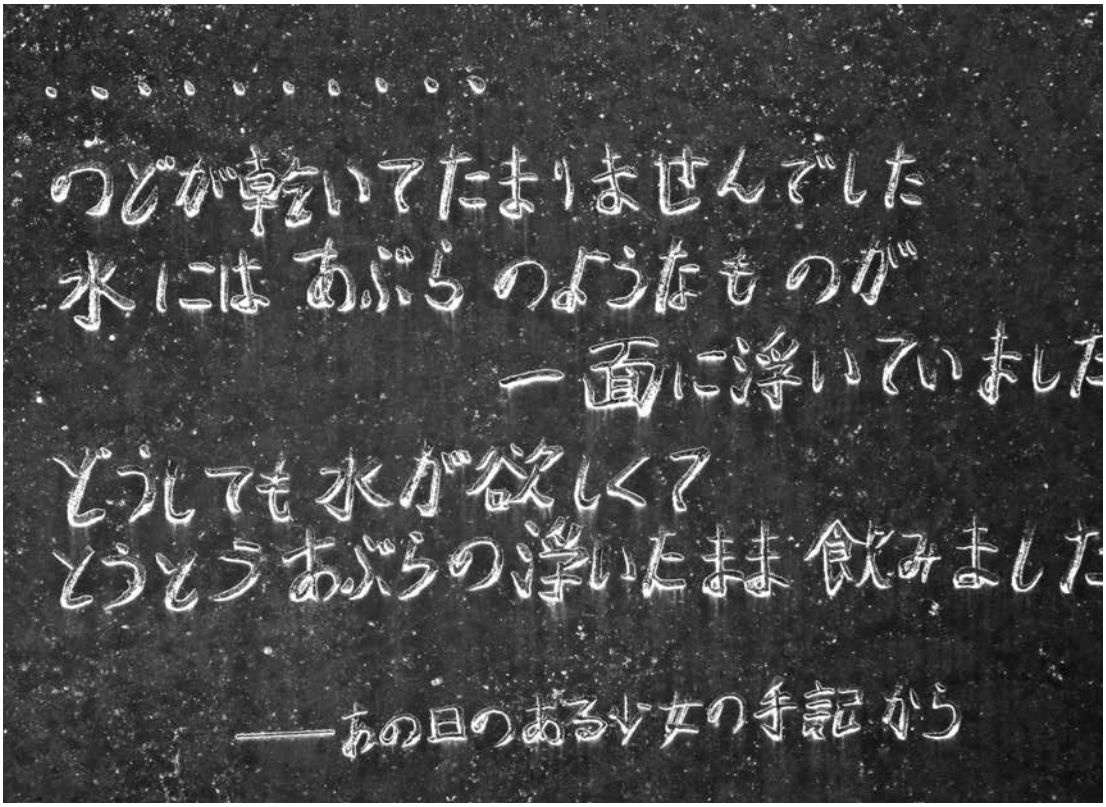
当時被爆した、築城昭平さんの話が印象に残った。「昼なのに真っ暗で、死の世界のようだった。」この言葉で、私は戦慄が走った。近くにいる友達も自分自身も真っ赤で、防空壕付近の人たちは、化け物のように変貌していたらしい。まさに地獄のような体験だったと。話を聞いていただけだが、すっと寒気がした。原爆の放射線の影響で、未だに後遺症（原爆病）が残っている人もいるそうだ。色の落ちた写真は、見ていて痛々しかった。

原子爆弾の威力を、音で聞いた。１個だと「カンッ」という小さな音だった。しかし、世界にある原爆の数（13,880 個）は「カカカカカカカカカカカカッッッッ」という金属音のような耳障りな音だった。世界にはこんな大量の原子爆弾があると思うと、それだけで怖かった。

班活動では、なぜ争いは起こるのかを題材にして、ピースボランティアの方や他の地域の中学生と話し合い「資源や土地・食べ物の貧しさや欲求」という意見が出た。それをなくすために、ボランティアや寄付をするといった、日常的に始められる活動が挙げられ、私も実行しようと思った。ピースフォーラムでは原爆や戦争の悲惨さだけでなく、これから自分たちが出来ることを話し合える場だった。自分には無かった意見もあり、とても勉強になった。

（３）平和祈念式典

原爆資料館のモニターに映る式典の様子は、厳かな雰囲気をまとっていた。平和への誓いを読み上げた山脇佳郎さんの、熱のこもった朗読が胸に染み込んだ。他にも、被爆者の方々が奏でた「もう二度と」の合唱、原爆の被害により、父親の死を目の当たりにした兄弟の話などがあり、どれも辛く悲しい感情が現れていた。原爆は人を追い詰め、傷つけるものなのだ。そう改めて再認識する場となった。



＜平和の泉の石碑＞

3　心に残ったこと

写真の石碑に刻んであるのは、被爆して、水を求める少女の言葉である。原子爆弾が長崎に落とされ、高温に全身を焼かれ悶え苦しみ、水を求める人々がたくさんいた。だが、火傷を負った人に水を与えてはいけなかったため、苦しんで亡くなっていく様を見ているだけだった人もいたという。

「油が浮いた水を飲んだ」というのが衝撃的だった。今では絶対ありえないし、まだ小さい少女が水を求めて苦しんでいる様子は、あまりにも可哀想でならない。そしてそのことに怒りがわいた。原爆がもたらすものは、平和でもなんでもなくただの殺戮であることに。

世界にはまだ、たくさんの核兵器を所持している国がある。だがそれは、人類を、地球を破壊へ追い込む行為ではないだろうか。なぜ、核兵器を廃絶しないのか、ただそれが疑問である。被爆者の声に耳を傾け、二度と同じことが起こらないように、核兵器を廃絶するべきだ。

そして今回、研修に行った自分たちが、原爆の恐ろしさを伝え、今ある平和の尊さを伝えていくことが大切である。

4　派遣研修に参加して感じたこと

派遣研修では、自分の戦争や原爆についての知識をより深められた。

原爆資料館に展示されていた、当時の悲惨な状況には、言葉を失った。自分が想像しているより、ずっと恐ろしいものだったのだ。

原爆が落とされた過去をもっている長崎だが、帰りのバスから見たそこは、とても美しかった。何十年と時間をかけて、長崎に住んでいる人たちが復興に力を注いだことを思うと、胸が締め付けられた。原子爆弾は、何も生まない。改めてそう思った。

「平和」。この言葉の意味が、より深く伝わった。今ある平和は、決して当たり前ではないということも。そして、今ある平和を、当たり前を、大切にして生きていこうと思った。

私たちに出来ることは、原爆のことをたくさんの人に伝えて、戦争が起こらないことを祈ることである。これを期に、多くの人に戦争の恐ろしさを理解してほしい。戦争が起こらないようにするために、なにか小さいことでも自分にできることはないだろうか。祈るばかりでなく、身近なことから少しずつ活動することも、平和への第一歩なのではないかと思った。

世界中の平和を願って

郡山市立小原田中学校２年　安　田　悠　人

1　派遣研修への参加に当たって

僕が「長崎」と聞いて思い浮かべるもの「カステラ」、「トルコライス」、「隠れキリシタン」、そして「原爆」だ。忘れてはいけない。長崎は原爆が落とされた都市なのだ。僕は、小学校の社会の授業で広島と長崎に原爆が落とされたのは知っていた。６月下旬に長崎派遣事業の話があり、教科書では学べないことを、現地に行って身体のすべてで感じたいと思い、参加を希望した。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館

原爆資料館には、原爆投下によって被害にあった物や、その当時の写真などが展示されていた。はじめに、原爆が投下された時刻「午前 11 時２分」で止まったままの時計があった。時計の一部はなくなっていて原爆の威力の恐ろしさも知ることができた。

その他にもたくさんの展示物があった。その中でも僕が特に印象に残ったものがある。それは、女子学生の弁当箱だ。爆心地から約 700m 離れた岩川町で被爆した堤郷子さんの遺品である。弁当箱の中には、その後の火災で炭化した米飯があった。美味しい弁当を食べようとしていたところに原爆が落とされたと思うと、胸が痛くてしょうがなかった。

（２）青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは全国から集まった小中学生たちと平和について考えることができた。はじめに被爆者の築城昭平さんから貴重な当時の話を聴くことができた。被爆直後のことや原子爆弾の被害などいろいろと教えていただいた。

築城さんは、学校の寮で当日の夜勤に備えていたために睡眠中に被爆した。布団を丸被りしていたため助かったそうだ。こんな貴重な話を聴くことは、今後なかなかできないだろう。だからこれからは僕たちが聴いた話を後世に受け継ぐ必要があると考える。

他にも、全国の人たちと戦争の原因や戦争をなくすためにはどうしたらいいかを考えることができた。この時、はじめて真剣に戦争について考えた。いろんな意見が出て、なるほどと思う意見や自分が思いつかなかった意外な意見など、いろいろ出た。また、最後に各班から出てきた意見を大きなボードに書いて合わせると、平和祈念像や浦上天主堂、一本柱鳥居の絵が完成した。こうして一つにすることで平和はみんなで作っていくものだと感じた。

（３）平和祈念式典

８月９日、中継会場である原爆資料館ホールにて平和祈念式典に参列した。式典は、長崎市長の平和宣言や被爆者代表挨拶、安倍総理大臣などの来賓挨拶があった。この式典で印象に残ったのは式典冒頭の「もう二度と」の合唱だ。世界で唯一の被爆者からなる合唱団による合唱だ。この歌の最後に「もう二度と作らないでわたしたち被爆者をこの広い世界の人々の中に」という歌詞があった。被爆者自身が歌っているのでぐっと胸に想いが伝わってきた。この願いを叶えるためにも想いを伝え続けていこうと思った。

＜長崎に投下された原爆 ファットマン＞

3　心に残ったこと

心に残ったものは長崎型原子爆弾「ファットマン」だ。これは長崎に投下された原爆のレプリカだ。

「ファットマン」とは「太っちょ」という意味で実物もすごく大きかった。高さは 3.25m、重さは 4.5t、直径 1.52m だ。しかし、放射性物質を出すプルトニウムの部分は、わずかソフトボールとほぼ同じサイズしかないのだ。それなのに、今も放射線による影響で苦しんでいる人がいると思うと、やはり原爆はものすごい威力を持っているのだと分かる。

しかし、まだ約 13,880 発もの核兵器が存在している。しかも、新たに核兵器を作っている国もある。核兵器の製作を止めるために核兵器の悲惨さを訴え続ける必要がまだあると思う。

4　派遣研修に参加して感じたこと

長崎派遣事業に参加して、教科書では学べない現地でしか知ることができないことを知ることができた。また、長崎の人はどこよりも平和を強く願っていることが分かった。

長崎に行って、戦争はあってはいけない、核兵器は必要ではないことを改めて知ることができた。正直、僕はこのままだと平和な未来は保たれないと思う。しかし、僕たちが「戦争はダメ」、「核兵器はいらない！」そして「平和を大事に」と声を上げて身近なところへと発信していくことで、世界の平和は保たれると信じている。まずは家族や友達、先生方などに伝えていきたい。

平和の大切さ

郡山市立宮城中学校２年　伊　藤　　暉

1　派遣研修への参加に当たって

今から 74 年前、日本に原爆が落とされた。何万人もの命が一瞬のうちに奪われた。

戦争について初めて知るきっかけとなったのは、祖父だ。終戦の年に生まれた祖父は、戦後の日本のことを折にふれ僕に話してくれた。その話を聴き「広島」、「長崎」に原爆が落とされたことについて関心を持つようになった。

インターネットや本を通して、戦争当時の人々の暮らしや被爆者の方の経験談、原爆投下直後の写真などについて調べた。詳しい状況を知れば知るほど、胸が苦しくなった。

また、毎年テレビで放送される広島、長崎で行われる平和祈念式典を見て、被爆者の方が語る悲しい過去の状況と、戦争は二度と繰り返してはいけないという強い想いが伝わってきた。そして現地へ行き、実際に目で見て、耳で聴いてみたいという想いがより強くなった。「戦争のこと、原爆のこと長崎についてもっと知りたい。」この想いから今回の研修に参加した。

2　派遣研修に参加して

（1）原爆資料館

11 時２分を指して止まっている時計は、爆風により破壊されている。それを見たとたん原爆の恐ろしさを知った。

他にも、長崎型原爆ファットマンの実物大模型、溶けて曲がってしまった瓶、ボロボロになった作業服。すべてのものが、原爆の恐ろしい真実の様子を伝えてくれた。この悲しい事実を僕は目の当たりにした。たった一発の原爆で、美しい長崎の街も人もすべて消えてしまったと思うと胸が痛い。

その中でも一番衝撃を受けたのは、見渡す限り焼け野原となった市街地の写真である。建物は崩れがれきの山となり、道には黒こげとなった人や動物の無数の遺体。生きていた時の面影は全くないほど無残な姿に変わっていた。

また、各地から届けられた平和の願いを込めた折り鶴や、数多くの作品も展示されていた。「戦争なんかしてはいけない」そんな気持ちがより強くなった。

（2）平和祈念式典

今までテレビで何度か平和祈念式典を見たことはあった。実際に式典に参列し、「この世界から核兵器を廃絶し、長崎を最後の被爆地とするため皆さんの力を貸してください。」という被爆者代表による言葉が、特に心に残った。自分の体験をもとに平和への想いを語る「平和への誓い」の最後の言葉だ。実際に原爆を体験し、その恐ろしさを知っているからこそ、あの日を繰り返したり、忘れたりしてはいけない、といった被爆者の方たちの強い想いを直に感じることができた。

式典では、被爆者や遺族代表、長崎市の児童生徒の皆さんが原爆死没者に献水を行い、各国の代表の方が献花をした。被爆者の方たちによる合唱には心を打たれた。その歌詞一つひとつに平和を願う気持ちが込められていて、その想いが伝わってきたからだ。この平和祈念式典は、世界にとっても日本にとっても非常に価値のあるもので、これからも続けるべきだと感じた。

＜如己堂＞

3　心に残ったこと

「如己堂」は永井博士が被爆した後、３年間住んだ二畳ほどの小さな家だ。原爆の影響で寝たきりとなってしまった博士だが、原爆の放射線による病気の研究をしながら、「長崎の鐘」や「この子を残して」などの本を 17 冊も書いた。寝たきりとなっても、戦争や原爆の恐ろしさ、命と平和の大切さを訴え続けた。

僕が一番心に残ったことは、如己堂にある永井隆博士の言葉だ。「戦争はおろかなものだ。戦争に勝ち負けもない。あるのは滅びだけである。」という言葉だ。僕はこの言葉から被爆した後の長崎市の様子を想像することできた。特に「あるのは滅びだけである」という部分に永井博士の戦争に対する怒りや、悲しみを感じることができた。たった一発の原爆は、活気あふれる街、平和に暮らしていた人々の営みを破壊し、跡形も無くなってしまった。戦争をして、一つとしていいことがないと、改めて思った。

永井博士が、救護活動や病気の研究活動に熱心に行ったのには、「己のごとく隣人を愛せよ」という思想があったからこそではないかと、僕は思う。この言葉の意味は「自分を愛するように、周りの人を愛しましょう」というものだ。この考えは、現代の社会にも通じるもので、「人を愛する心」が戦争を、核兵器をなくす第一歩だと思う。

4　派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣事業を通して、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを感じた。戦争を二度と繰り返してはいけないと感じる、貴重な経験ができた、充実した４日間だった。

74 年前、長崎に一発の原子爆弾が落とされた。たった一発でたくさんの命が奪われた。今でも原爆による後遺症に苦しめられている被爆者がたくさんいる。

その平均年齢は、82 歳を超え、それと同時に戦争を知らない人がどんどん増えていく。この事実が忘れ去られて、「いつかまた戦争が起こってしまのではないか」という不安を持ってしまった。

では、そうならないために何が必要か。それは、「伝え続ける」ことだと思う。当時の状況、原爆の恐ろしさが分かれば、戦争や原爆がどんなに残酷で無意味ことかがわかるはずだ。

これからの僕には、これらのことを多くの人に知ってもらう機会がたくさんある。だからこそ、その責任を果たしたい。そして、一人でも多くの人に戦争や原爆の恐ろしさ、これらがもたらす残酷な結末を伝えることが、今回長崎に行き、目で見て、耳で聴いてきた僕の役目だと思う。

平和への第一歩

郡山市立御舘中学校２年　横　田　優　美

1　派遣研修への参加に当たって

最近、「ミサイル」「核兵器」など、戦争に関するニュースをよく見る。その言葉が出てくるということは、今でも世界の何処かで戦争が起こっているという事だろう。それを聞いてとても悲しくなった。戦争なんて誰もしたくないはずだ。

今回の長崎派遣事業をきっかけにして戦争について考え、平和の尊さを、戦争を知らない次の世代に伝えたいと思い、この研修に参加しようと思った。

2　派遣研修に参加して

（1）原爆資料館

1996 年に開館した原爆資料館には、ファットマンを再現したものや、体内から取り出されたガラス片、溶けた瓶など、原爆に関する展示品がたくさん展示されていた。

私は、原爆資料館に行くまで、原爆の被害は放射線というイメージしかなかった。だが、原爆が落とされたことによる被害は、爆風、熱線、放射線の三つの被害があった。熱線の被害の中でも人間の手の骨とガラスが高熱のため溶けてくっついているという展示品に衝撃を受けた。それほどまでに高熱になってしまう威力の爆弾を落とされて亡くなられた方々の気持ちを考えると胸が痛くなった。

（2）青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の話を聴いたり、戦争は何故起きるのかを全国の同世代の人たちと一緒に話し合ったり、平和の尊さを学習した。

この、青少年ピースフォーラムには、400 人以上の参加者がいた。平和への関心があり積極的に活動できる人が、こんなにも多いことに驚いた。

被爆者の話として築城昭平さんの話を聴いた。戦争中に築城昭平さんは、「日本は正義の戦争をしている。戦争をしないと世界が不正義になる。正義の日本は絶対に勝つ。」と教えられていたそうだ。今では信じられないことだが、そんな時代もあったのかとショックを受けた。もう一つショックを受けたことがある。それは、爆弾が落ちた時にその爆弾が核爆弾であるということを知らされなかったということだ。放射線のことを知らなかったせいで、そこにとどまり、亡くなってしまった人がたくさんいたそうだ。救護隊も亡くなり、助けも来ず、熱線で靴が溶け、裸足のまま何キロも離れた避難所まで自ら歩いて行ったそうだ。

築城昭平さんは、「世界の人が原爆のことを知れば、戦争が少なくなる。」と言っていた。私は、まずは周りの人たちに原爆の事を伝えていきたいと思った。

（3）平和祈念式典

田上長崎市長や安倍内閣総理大臣などが参列し、会場には平和を考えるたくさんの人が訪れていた。この式典に参列し、私が感じた長崎平和宣言や平和への誓いの大切さを周りの人に伝えていきたいと思った。

＜ 11時2分で止まった時計 ＞

3　心に残ったこと

私は、原爆資料館に展示してあった、「柱時計」が心に残った。この柱時計は、原爆が落とされた、11 時２分を指して止まっている。この時計の他にも 11 時２分を指したまま止まっている時計が何個もあった。それは、その時間に原爆によって、時が止まったように一瞬にしてすべてを破壊した事を証明している。

私は、時計が止まったのと同じように、亡くなってしまった方の人生も 11 時２分で止まってしまったと思う。それはとても悲しく、この 11 時２分という時間を決して忘れてはいけないと思った。

4　派遣研修に参加して感じたこと

私は長崎に原爆が落とされて、多くの犠牲者が出たということしか知らなかった。研修に参加し、学ぶことがまだまだたくさんあることを実感した。この研修で、私は当たり前だった平和がどれだけ尊かったかを知ることができた。実際に長崎に行ってみて、知らなかった事がたくさんあった。インターネットや教科書から知る情報では分からなかった、原爆の恐ろしさや、戦争の悲惨さを自分で見て、聴いて、考えることができた。

今の私は、まだこの事実を世界中に伝えることは難しいかもしれない。しかし、戦争は絶対にやってはいけない事、平和を守っていく事、これらのことを、私なりの伝え方を模索しながら、形にしていきたい。

核兵器の無い世界へ

郡山ザベリオ学園中学校２年　川　村　彩　人

1　派遣研修への参加に当たって

僕が、長崎派遣研修への参加に当たって思うことは、三つある。

一つ目は、長崎に原爆が落とされたことによって、日本の人々は、平和についてどのように考えたのかをしっかりと理解したい。

二つ目は、今まで平和について深く考えたことがなかった。だから、平和公園などの様々な原爆に関する施設などを通して、平和の大切さを深く知りたい。また、世界にはなぜ平和が必要なのかを考える機会にしたいと思う。

三つ目は、共に派遣される他校の生徒と、集団行動を意識し、交友を図りたいと思う。

そして、共に平和の大切さを学びたい。

2　派遣研修に参加して

（1）原爆資料館

原爆資料館の入口を入ってすぐのところに男の子の写真があった。男の子が赤ちゃんを抱えて倒れた家の前に立っている写真だった。僕はその写真を見て、きっとこの男の子は赤ちゃんと一緒に家族を待っている様子だろうと想像できた。原子爆弾によって自分の大切なものを失うということがどんなに悲惨なものであるかが伝わってきた。

長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」の模型や体中に火傷を負った写真など、展示物の中でも一番心に残ったのは溶けたロザリオだ。なぜならこの持ち主は、戦争の終結や平和な生活など多くの願いを込めて、このロザリオを使用していたはずだ。その願いが届く前にたった一発の無差別的な攻撃により元の形が一瞬で変わり果て、さらに持ち主の願いが一瞬で消えたことに深い悲しみを感じたからだ。

（2）平和公園

公園の北側中央にある平和祈念像は愛と仏の慈悲を象徴している。空に向かい手を掲げている右手は「原子爆弾の脅威」を、水平に伸ばした左手は「平和」を表現している。また顔は戦争犠牲者の冥福を祈るとされている。

この像を見上げて瞬時に、被爆者を含む長崎の人たちが平和について真剣に向き合い平和の大切さを世界に発信しているのだと感じた。

公園内にはもう一つ印象的なものがあった。原子爆弾によって体内まで焼けただれた被爆者たちは「水を、水を」とうめき叫びながら亡くなっていった。その痛ましい霊に水を捧げて、冥福を祈るために建設されたのが「平和の泉」だ。

ここに、ある少女の言葉が刻まれていた。

「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」今の日本では想像することができない。おいしい水さえ飲むこともできずに生涯を終えたことがどれほど辛いことなのか身にしみて感じることができた。

（3）被爆 74 周年平和祈念式典

僕は、式典の中で山脇佳朗さんの最後の言葉が、この祈念式典の目的であり平和への誓いなのだと強く感じた。

「Please lend us your to strength to eliminate nuclear weapons from the face of the earth and make sure that Nagasaki is the last place Earth to suffer an atomic bombing」

「この世界から核兵器を廃絶し、長崎を最後の被爆地とするために皆さんの力を貸してください。」 この言葉こそが、自分たちが必ず実現

＜溶けたロザリオ＞

しなければならないという強いメッセージだと感じたからだ。

3　心に残ったこと

この写真はキリスト教（カトリック教会）が祈りを唱えるために使うロザリオだ。ロザリオは、僕にとっても幼いころから使い、なくてはならない心の支えになっている。

このロザリオは爆心地から約 500 メートル離れた場所で発見された。長崎は原子爆弾が投下される 10 日前から空襲を受けていた。

きっとその時からまたはそのずっと前から早く戦争が終わって平和な日々がくることを願い、祈っていたはずだ。その願いが届かないまま一瞬にして祈っている人の心もこのロザリオも溶けてしまったのだ。

またピースフォーラムで直接被爆者の体験を聞けたことが僕の心に残った。奇跡的に生き残ったこと、体が赤や黒に変わり出血しても痛みさえ感じなかったこと、３日前の広島の原子爆弾の投下を知らなかったこと、11 時２分の爆弾が原子爆弾とは全く思わなかったことなど多くのことを教えてくれた。その後も癌などの様々な病気を患い、その治療に何年もかかったそうだ。その方は 11 歳の時に被爆した。今 13 歳の自分がその時のことを体験したら今日まで生きてこれただろうか、とても多くのことを考えさせられた。

4　派遣研修に参加して感じたこと

僕の祖母は現在 80 歳だ。この時期になるとよく戦争の体験を話してくれる。福島市が空襲を受け防空壕に避難したことや、火災の危険があるからといって家を壊され住む場所を失ったことなどを話してくれた。しかしこの研修に参加するまではあまり関心をもって聞いていなかった。長崎に行って自分の間違いに気づかされた。祖母に対してとても申し訳ない気持ちになった。

長崎や広島とは比べようもないが、その時代を生き抜いた人たちの強さを感じた。

長崎で感じた戦争の悲惨さ、そして何より核兵器の恐ろしさを忘れることはできない。

自宅へ帰ってすぐに家族と「平和」について話し合うことができた。戦争のない世界を作るためには、人が人を尊重し、すべての人が思いやりの気持ちを持てば戦争につながるような争い事はなくなると思う。

最近、核兵器に関する議論を各メディアを通して耳にする。自分が考えるには「核開発」とか、「核保有」とか議論することではなくて僕らの使命は「核兵器」の数を「０」にすることだ。

平和への想いを受け継いで

郡山市立西田学園８年　遠　藤　亜　子

1　派遣研修への参加に当たって

今まで私は「戦争」について、社会科の授業で学習してはいたが、特別深く考えたりすることはなかった。そのため、戦争による被害への知識も漠然としており、「平和」を当たり前のものとしてしか考えていなかった。しかし、昨年度、この事業に参加した先輩の発表を聴き、「私はもっと知らなければならない。考えなければならない。」そう思った。日本の過去を学び、戦争の悲惨さを知ることで平和の尊さを学ぶ機会になると考え、参加を決めた。

2　派遣研修に参加して

（１）原爆資料館

原爆資料館で最初に見たもの、それは「11 時２分のまま動かなくなった時計」だった。私はこれを見た途端、全身の力が抜けた。写真では見たことがあったが、いざ目の前にすると、魂を吸い取られて力を失っていってしまうような感覚に襲われた。もし、自分があの日の長崎、「11 時２分」の場にいたらと思うと…。私は、一つひとつの展示物を見るのが怖くなり、「この現実を知ることが辛い」、「原爆資料館から出たい」とさえ思ってしまった。そんな私を前に進めたのは、「知らなければならない。考えなければならない。」そんな決意だった。

原爆資料館には、熱線により溶けてしまった６本のビン、人間の手の骨とガラスがくっついてしまったもの、頭蓋骨が付着した鉄カブトなどが展示されており、その全てが原爆の恐ろしさを物語っていた。一瞬にして多くの人の尊い命を奪い、何もかもなくしてしまった…。このようなことをいったい誰が望み、誰が喜ぶのだろうか。

「原爆は何も生まない。」私はそう思った。

（２）青少年ピースフォーラム

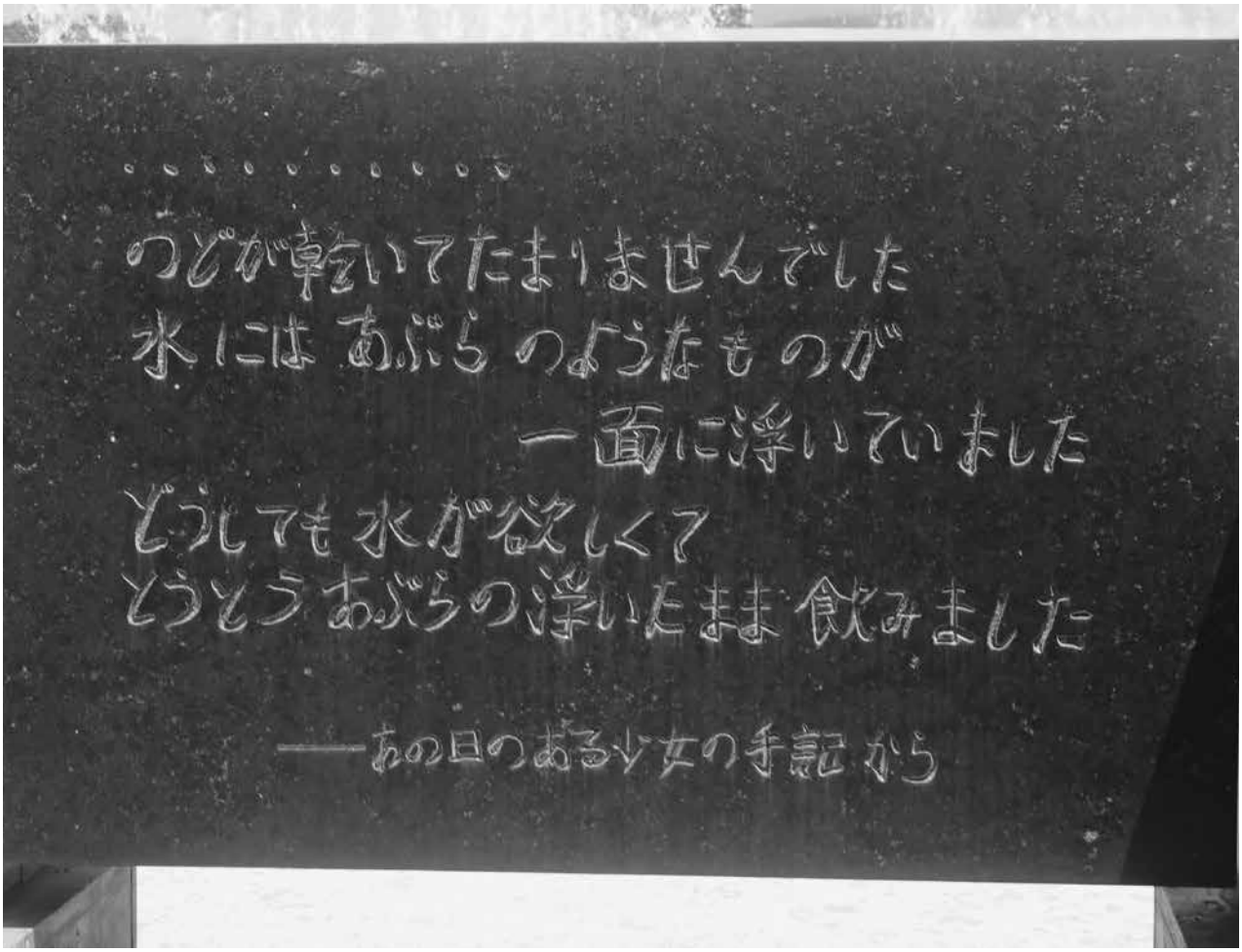
ピースフォーラムには、全国各地からたくさんの人が参加していた。初めに被爆者である、築城さんから当時の話を聴いた。衝撃的だったのは、「みんな、どっちが前なのかもわからないくらい血だらけだった。地球に僕らだけなんじゃないかと思うくらい絶望だった」というお話だった。私には想像すらできない状況の中を必死に生きぬいたお話に、私は言葉を失った。こうして築城さんが、私たちのために体験談を話してくださったことをありがたく感じた。築城さんの話を絶対に忘れてはいけないと思った。

（３）平和祈念式典

式典は、被爆者の方々の合唱からはじまった。その歌からは、実際に被害にあった方々の強い想いが「もう二度と作らないで　私たち被爆者を」という歌詞とともに伝わってきた。原爆投下時刻の午前 11 時２分、私たちは原爆の被害で亡くなられた方々へ、１分間の黙とうを捧げた。74 年前、今まさに、この瞬間に投下された原爆により、何の罪のない人々の尊い命が奪われてしまったことを私は許してはならないと思う。「もう二度と原爆による被害を出さない。」と１分間、心に誓った。

3　心に残ったこと

「……のどが乾いてたまりませんでした　水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました　どうしても水が欲しくて　とうとうあぶらの浮いたまま飲みました　あの日のある少女の手記から」これは、当時９歳だった山口幸子さんが書いたものだ。その後ろには「平和の泉」がある。原爆で体内まで焼けただれた被爆者は、「水を」「水を」と、水を求めながら亡くなって



＜平和の泉＞

いった。その霊に水を捧げて冥福を祈り、あわせて世界恒久平和を祈念するためにここに建設したそうだ。

私が「平和の泉」を訪れた日、清々しい青空に向かう清らかな水がとても印象に残った。私は、山口幸子さんの手記を読んで当時の様子を想像して心を痛めた。噴水の水がとても美しく尊いものとして感じられ、この水の清らかさが平和そのもののように思えた。「この水を絶やしてはいけない。この水を大切にするように、平和を守らなければならない。」そう考えながら、水の清らかな流れを前に「平和を自分たちの手で築いていかなければならない。」そう心に誓った。

4　派遣研修に参加して感じたこと

私に更なる使命ができた。「私はもっと知らなければならない。考えなければならない。」そう思って参加した研修だったが、「私は知ったこと、考えたことを伝えなければならない。」そして、さらに、「私は行動しなければならない。」という使命ができた。長崎に投下された原爆は、多くの命、たくさんのものをこの世から奪い去った。「原爆は何も生まない。」原爆資料館を見学して感じたことだが、もしかすると、「苦しみと悲しみ、そして憎しみを生みだした。」とは言うべきなのかもしれない。しかし、この研修に参加して多くのことを知り、「平和」を真剣に考えるたくさんの人との出会いを通して、「平和を守り、築く力になりたい。」という気持ちが私に生まれた。原爆投下から 74 年、原爆を知る人が少なくなるにつれ平和への意識が薄れつつある今、決して消すことのできない悲しみの過去を未来に生かしていけるよう、私は、平和への想いを受け継ぎ、一人でも多くの人に発信していきたいと思う。

この研修に参加させてくださり、ご支援くださった方々、長崎で出会ったたくさんの方々への感謝の気持ちと共に、今後への決意を新たにしていきたい。

平和のための僕の使命

郡山市立湖南小中学校８年　谷　苗　真　拓

1　派遣研修への参加に当たって

1945 年８月９日、長崎市に原子爆弾が投下された。毎年、夏休みにテレビで放送される式典等のニュースで以前からこのことは知っていた。しかし、74 年前に戦争がもたらした被害の大きさについては漠然としか知らなかった。連日、テレビ報道や新聞等で目にする、他国の戦争報道や核爆弾の脅威。だが、自分のどこかでは遠い世界の事だと、自分にはあまり関係のないニュースとして認識していたのかもしれない。そんな中、「長崎派遣事業」を知り、戦争や原子爆弾というものについて、もっと知りたいと思い参加しようと思った。

2　派遣研修に参加して

（１）永井隆記念館

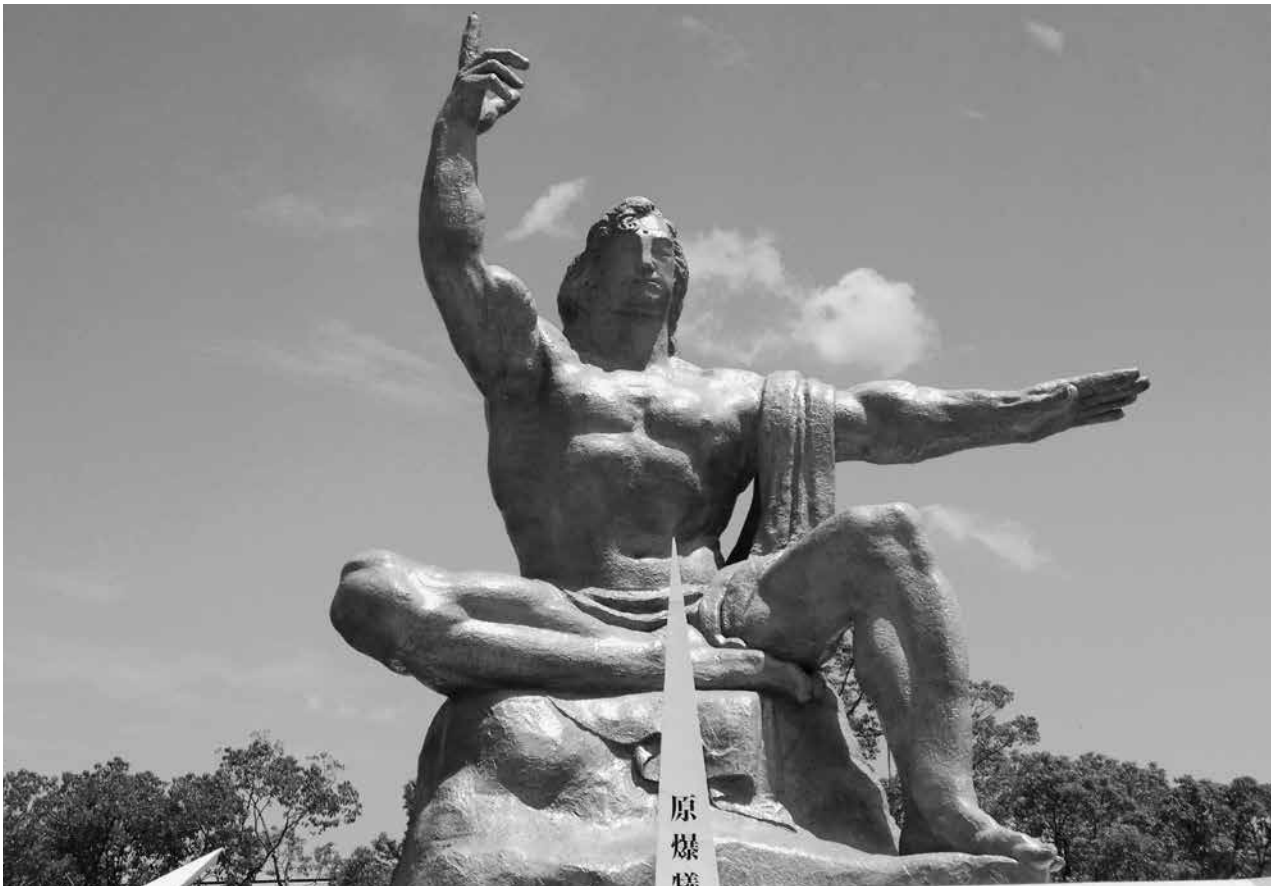
永井隆記念館は、永井博士が残した功績や出版した本が展示されており、永井博士の生涯について詳しく知ることが出来た。医師を志し、放射線医学の研究中に白血病となり、余命宣告を受け、更に原爆投下により勤務中に被爆。しかし、被爆して大怪我を負った我が身をかえりみず、救護活動を行っていた行動力が強く印象に残った。その生き様は、「己の如く隣人を愛せよ」という永井博士の残した言葉そのままだと感じた。自分を愛するように、周りの人を愛しましょうという意味で、永井博士が平和を求めて生きていたのがよく分かった。生涯で、17 冊もの本を執筆していて、中には外国語に翻訳され世界中の人々に読まれた本もあった。また、永井博士は本の執筆で得たお金を長崎市の復興のために寄付をした。この人間性も素晴らしく感銘を受けた。

（２）原爆資料館

原爆資料館では被害を受けた建物の一部や当時の写真や日用品等が展示してあった。中でも印象に残っているのは、原爆が投下された 11 時２分を指して止まっている時計だ。何故か僕は、東日本大震災を思い出していた。この時計も、津波により止まった時計も、被害にあった人はそこで本当に時間が止まったんだと感じた。そして、「ファットマン」という原爆の模型を見て思ったことがあった。震災は自然災害だが、この原爆は人災だ。この原爆で多くの尊い命を奪ったのかと思うと、戦争の恐怖を感じ、いっきに鳥肌がたった。世界には核兵器を所持している国が複数国あるという資料を見て僕はとても残念に思った。悲劇しか生まない核兵器がこの世界からなくなることを強く願いたいと感じた。

（３）青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、二日間に渡って全国の小学生、中学生、高校生と意見交換や交流活動を行った。戦争を知らない私たちの世代で、平和についての話し合いをした。何故争いが起こるのかについて、解決策を班ごとに話し合いを重ねた。文化も言葉も違う人たちでは、考えも違うが一つだけ共通していることがあった。万一、戦争が起きれば尊い命が奪われるということだ。争いの先になにがあるのか、世界で唯一の被爆国である私たちが、世界平和について大きな声を上げ続けなければならないと、改めて感じさせられる時間となった。



＜平和祈念像＞

3　心に残ったこと

上の写真は、平和公園にある「平和祈念像」である。原爆投下の 10 年後になる、1955 年に北村西望氏によって造られ、神の愛と仏の慈悲を象徴している。像の右手は、この場所から約 500m 上空で原爆が爆発した空を指し、その脅威を表しているそうだ。像の左手は、水平に伸ばし平和を望んでいるとのこと。横にした脚は、原爆投下後の長崎市の静けさ、立てた脚は救った命、少し閉じた目は犠牲者への冥福を祈っているそうだ。テレビや写真で目にしたことはあったが、実物を目前にすると、とても大きく迫力があった。74 年前の惨状と未来へ向けた平和への願いを感じられずにはいられなかった。この像は、多くの人へ様々なメッセージを与え続けてくれるだろう。是非、世界中の多くの人々がこの場に訪れ、戦争のない、核兵器のない世界へ、同じ方向を向いてほしいと思った。この像とともに、犠牲者へのご冥福を祈りながら、私たちの若い世代が、次の世代へ平和のバトンを繋いでいかなければならないと強く思った。

4　派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣を通して、戦争の悲惨さや、人の愚かさ、核兵器の恐ろしさなどがよく分かった。原爆は、放射線を放出し後遺症によって、人々のその後の人生にまで、大きな影響を及ぼしてしまう。74 年前の悲劇をもう二度と繰り返さないためには、この世の中から核兵器を手放さなければならないと思う。今現在、世界には 1 万 5 千発程の核兵器が存在するそうだ。そもそも、戦争はなぜ起こるのか。核兵器はなぜ必要なのか。その先には、人類の平和はあるのか。疑問は尽きないが、この研修で分かったことがある。戦争は、すべての人から、大切なものすべてのものを一瞬で奪い去る怖いものだ。私たちが当たり前に生活している、今の平和を、この先永遠に継続していくためにも、戦争を知らない私たち世代に戦争とは何か、核兵器とは何か、そして平和とは何かを一緒に考え、伝えていくことが何よりも大切ではないかと思った。僕は、この長崎の地で学んだことを一人でも多くの人に伝えていく。永井博士にはなれないが、僕ができる平和のためにできることから。

【表紙に掲載されている祈念碑】

「長崎の鐘」（平和公園）

原爆投下後33回忌となる1977年に、遺族や被爆者およそ21,000世帯の拠出金により建立された。原爆殉難者の冥福を祈り、世界の恒久平和への願いが込められている。

「浦上天主堂遺壁」（爆心地公園）

爆心地から約500メートルの場所にあった教会「浦上天主堂」は、原爆による爆風で破壊された。この遺壁は、天主堂南側の壊れて残った壁の一部を移築したものである。

「原子爆弾落下中心地碑」（爆心地公園）

この碑がある長崎市松山町の上空約500メートルで原爆が炸裂した。塔の前に置かれた原爆殉難者名奉安箱には、爆死された方、被爆者でその後亡くなられた方々の氏名（複製）が奉安されている。

「平和の母子像」（平和公園）

再び、あの惨禍を繰り返さぬ誓いを込め、平和の切なる願いを次世代へ伝えるため、１９８７年８月１日に長崎平和の母子像を建てる会によって建立された。

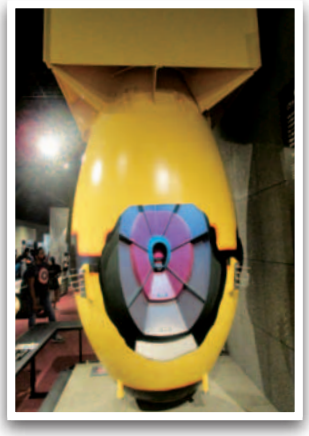
「原爆殉難教え子と教師の像」（平和会館前）

原爆で亡くなった児童・生徒の慰霊のため、1982年に教職員らによって建立された。上に立つ巨人は原爆の脅威を振り払おうとする姿を、下の子どもたちは平和を叫ぶ姿を表している。

令和元年度　郡山市中学生長崎派遣事業
「２０１９　ナガサキへのメッセージ」報告書

発　行　日　　令和元年１１月２３日
発　行　者　　郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会
（事務局：郡山市総務部総務法務課）

〒963-8601　郡山市朝日一丁目２３番７号
電　　話：０２４－９２４－２０３１
ＦＡＸ：０２４－９２４－０９５６
Ｅメール：soumuhoumu@city.koriyama.lg.jp

印　　刷　　郡山市総務部総務法務課
製　　版　　株式会社ヨシダコーポレーション

郡山市